

尾  
給  
集  
集

中村俊定文庫  
文庫 18  
871





序



風雅と俳諧の大意を  
人情をうつゝぬゝの意外は自ら  
かゝるのあまらくまきこもれをよりの  
あまらくら乃ら地をそらそら  
を深くもれ其をらもれ  
少くも元禄の世を  
中村侯定乃絶る  
学人なれそら



今更の新なるにをを愛するも又あやふく  
 借取のゆきまを物をもたす終るはゆき人  
 にえ及ふまはれ予とて流の流の松  
 橋をまを去集の直しをゆき人去集乃  
 其ま度く折れを亦後の着をまを人とも  
 需るれ折るゆき人ゆき人ゆき人ゆき人  
 その折るゆき人ゆき人ゆき人ゆき人

弘化二己夏 五付尾之人

俣 借 拾 葉 集 後編



五件菴主人著  
 門葉中授合

那斗と尺とて定を時考 有節  
 あさくくわりの結をみしぬ 枕谷  
 掃除者一くみ入る木戸の 梅室  
 おろろあらしを袴ゆきけり 節  
 指針の考とききえそつる月 名  
 つまの志つてつまを 節 室  
 湯水の舟もゆきえさるるまの 節



男のやうなつゝも 妹 各

おんえさまきなの身を成す杖を 各

赤きもけり焼くよりのをさうし守 各

去ぬ舟を風を屋々響く何よやう 各

かゝやゝくはきさきを投あす 各

本造十下うぬちふ月あして 各

おとむれあふくこゝろを初より 各

つゆまゝに細う火を焚く後の信 各

いふれ知くわとありうゝまき 各

招おろしよむせをさうれおき 各

又酒をさみろり入 各

お代よ子の節あての言をき 各

上ゝを何と下てぬる室は 各

株あけをさうんを成す室は 各

さうりく 携る 各の節 各

り通し人のとまはれをけり 各

かゝる致きうりおのきあらむ 各

疎の懐乃およひあふ別産を 各

酒やをさうり 知己十減る 各

みさうりよ一とまおかゝぬ 各

各

各



初〜〜川つとま〜〜まの月  
 燕も啼か〜〜と啼く時後り  
 杭打傍のか〜〜 傍新  
 よ〜〜のち〜〜と〜〜川通  
 加古一途入人〜〜中  
 昔まをた屋敷の餅〜〜  
 古産の花〜〜珠毎の〜〜  
 旅人〜〜丸れ土の〜〜成〜〜  
 西の〜〜と〜〜雲在 行去る  
 室 舟 舟 舟 舟 舟

凡そ通る方角杭やかた屋敷  
 とも〜〜ひ〜〜立上る 形 清泉  
 岸も〜〜の多き様是て 池  
 き〜〜に〜〜と〜〜と〜〜  
 傍り〜〜燈塔の月乃入おれ 池  
 も〜〜雷の光〜〜と〜〜 傍新 泉  
 出代の岸を〜〜と〜〜と〜〜 池  
 あ〜〜の〜〜と〜〜と〜〜 傍新 泉  
 当分を通る所のな〜〜ぬ川の音 池



とうとう、燈先のうしろに燈心  
 焚のともをゆきぬれぬひをひ  
 るゆの人々やうつらに流るるたう  
 かのうらや春城さき、宵の月  
 なるまきくさく、何處はひき  
 きたりよく、取るとおとすもはなれ  
 追後して、枝持をまきまき  
 つらみさうのたもさうらも、樹のた  
 とんとう、風く、あめをひきさう  
 彼岸を、人よき、たれ、たれ、うら

池 鼻 池 鼻 池 鼻 池 鼻 池 鼻 池 鼻 池 鼻 池 鼻

とうとうあきさき、これハ、障を、つらやむ  
 其、信よ、きく、新、ま、あ、う、て  
 廣う、ま、障、ぬ、六、月、の、あ  
 梅、福、の、ひ、く、く、う、さ、う、さ、う、く  
 あ、く、く、燈、子の、汗、子、ま、き、る  
 病、眼、く、く、く、く、酒、ち、あ、め、る  
 ま、う、り、燈、着、ふ、あ、ま、つ、く、亮  
 月、を、さ、う、昇、ま、よ、は、あ、ぬ、く、く、く  
 追、く、ま、け、も、あ、い、新、絹  
 跡、の、あ、の、ま、く、あ、う、く、上、学、履

池 鼻 池 鼻 池 鼻 池 鼻 池 鼻 池 鼻 池 鼻 池 鼻 池 鼻 池 鼻 池 鼻



乾きの日々の寺のゆり 篇 池  
 皂樹の鳥のこころ 小をえ 鼻 池  
 ちちちち せつく 夢まきの花 鼻 池  
 度さのこころ 多付のぬくのこころ 鼻 池  
 めつめい 加減のまじり ぬわ物 池 鼻  
 五つのおね ちちちち 花のまじり 鼻 池  
 梁くわけのく 相の芽を 池 鼻

朝のぬれをちちちち ちちちち 有 鼻  
 旅をちちちちちち ちちちち 思 文  
 はあ付のちち ちちちち ちち 鼻 文  
 後ちちちちちち ちちちち ちち 鼻 文  
 ちちちちちちちち ちちちち ちち 鼻 文  
 ちんちちちちち ちちちち ちち 鼻 文  
 ちちちちちちちち ちちちち ちち 鼻 文  
 ちちちちちちちち ちちちち ちち 鼻 文  
 ちちちちちちちち ちちちち ちち 鼻 文  
 ちちちちちちちち ちちちち ちち 鼻 文



年織ぬらひまゝのうらみ  
 家軒の縁をさつゝふ月の歌  
 志すゝ家扇の中おたぬる道  
 初能の歌く盛る輪成て  
 明りをもあまゝつの人とち  
 替丈もたれよ判せむ病より  
 うまをりまゝくたれうつくき空  
 荷付く初とぬれる麻とち  
 ともそくくた 医者のもや智恵  
 目けりちのたた墨の紙あゝ  
 文 文 文 文 文 文 文 文

ながみそ重の音と又んる  
 口笛うら花あつまるおちる  
 肩をも輪 裳はるのぬきさう風  
 片ちとあまは情の徳文のまゝ  
 花を仕りうる乃運入を所  
 ちまをりまゝの音とちあね血  
 陰のけりて花早ま土地て待月  
 情のやとて情あまうつらあれ  
 ぬきと葉の流のりあま葉の安  
 かゝけあて流くあ山蝶さ  
 文 文 文 文 文 文 文 文



おりのうを見をこのああつる  
まここのを居るく通ぬふき  
まをぬのうちのめりゆく  
救接く時中分ぬえんぬ  
ぬえんとあうるわくす  
文 文 節 文

お枝のゆきと出まくるお枝が  
くまのきくと水き、流雪のそ  
まをるを福色年の居るめて  
粟 蒼 札

あかりふ居のぬるる古 桶  
未ありの太角豆も実のるる  
仕更のりばさるるを 野  
ぬまをくち新居の碓まはあえ  
あうる乃おりの焼くめ  
掃除まを次まよふ居るはは出  
樽赤の世話うまをぬ降ま  
地蔵乃もや言めくかや  
古未あうるよ絶るく  
月代よ赤文の仕舞ひせり

粟 札 粟 札 粟 札 粟 札 粟 札 粟 札 粟 札



何そ紙とぬ角力場のあり  
 かつそりと紙のききとて合せ  
 ましききまのしりてぬきき  
 入船もまをぬぬ花をさ  
 まし時と替りききうたきき  
 永きりよ射あまのききき  
 ちきりききききききき  
 うききききききききき  
 しみききききききききき  
 たききききききききき

札 粟 札 粟 札 粟 全 札 粟 札 粟 札 粟

風船引ききききききき  
 料理場の紙をかきききき  
 やききききききききき  
 紙ききききききききき  
 今何紙ききききききき  
 月ききききききききき  
 まききききききききき  
 墨書あのはり子紙ききき  
 きききききききききき  
 折ききききききききき

札 粟 札 粟 札 粟 札 粟 札 粟 札 粟



ぬき成切くきく色舞中  
山さとの花と一友うほわり  
蕨のまらぬ苗主乃新下  
粟 丸 粟

引きよきんてつきの人くはり

伸うとそそくかきり子の花  
松葉うらまきうきほくもり  
出る月を待らち梅は葉茂て  
程あ〜お〜うか〜あ 兼合  
くみ少程さ著もわ〜く〜は〜り  
有節 言松 之者 立竹 言唯

燦々たる火乃うら〜あき雲  
後ひまもか〜う満き〜獨活信  
ま〜〜お〜〜〜子のあ〜ん  
岩屋さき胸もほああのつちらひ  
尺八揃う〜い〜あ〜〜乃喜お  
と〜〜の信〜〜と〜る香の泥  
葉て時刻のまらぬ山科  
月よりの麻儿もあ〜く仕まら〜  
か〜〜い〜あ〜〜と〜〜海着る  
ま〜〜〜一寸は〜あ〜〜ら〜る空き  
市川 兼言 兩律 以兼 芥 松 春 竹 唯 川



波ゆ〜〜ひよ〜〜に 葦ふね 葦  
 葦吹〜〜葦ふね〜〜る 麦粉菓子  
 白あ〜〜る〜〜地土出〜〜ける  
 押〜〜る〜〜も 坊主〜〜る〜〜の海苔役所  
 葦〜〜る〜〜 持〜〜く〜〜る 書 白  
 入 竹よゆ〜〜る〜〜の〜〜のき〜〜る〜〜  
 二番を 何〜〜る〜〜も 満ぬ 田の字  
 よ〜〜く〜〜る〜〜れ〜〜る 嘸お人の 嘸り 居り  
 身ゆ〜〜る〜〜る〜〜る〜〜る 居る 居る  
 名 柳〜〜る〜〜る〜〜る 居る 居る 居る 居る  
 り さま人つ〜〜る〜〜る〜〜る 居る 居る 居る 居る  
 下〜〜る〜〜る〜〜る〜〜る 居る 居る 居る 居る  
 々〜〜る〜〜る〜〜る〜〜る 居る 居る 居る 居る  
 尺〜〜る〜〜る〜〜る〜〜る 居る 居る 居る 居る  
 蓋〜〜る〜〜る〜〜る〜〜る 居る 居る 居る 居る  
 と〜〜る〜〜る〜〜る〜〜る 居る 居る 居る 居る  
 へ〜〜る〜〜る〜〜る〜〜る 居る 居る 居る 居る  
 屋〜〜る〜〜る〜〜る〜〜る 居る 居る 居る 居る  
 素 付〜〜る〜〜る〜〜る〜〜る 居る 居る 居る 居る  
 色〜〜る〜〜る〜〜る〜〜る 居る 居る 居る 居る  
 葦 川 唯 竹 書 松 節 素 符

波ゆ〜〜る〜〜る〜〜る〜〜る 居る 居る 居る 居る  
 葦吹〜〜る〜〜る〜〜る〜〜る 居る 居る 居る 居る  
 白あ〜〜る〜〜る〜〜る〜〜る 居る 居る 居る 居る  
 押〜〜る〜〜る〜〜る〜〜る 居る 居る 居る 居る  
 葦〜〜る〜〜る〜〜る〜〜る 居る 居る 居る 居る  
 持〜〜る〜〜る〜〜る〜〜る 居る 居る 居る 居る  
 書 白 居る 居る 居る 居る  
 入 竹よゆ〜〜る〜〜る〜〜る〜〜る 居る 居る 居る 居る  
 二番を 何〜〜る〜〜る〜〜る〜〜る 居る 居る 居る 居る  
 よ〜〜く〜〜る〜〜る〜〜る〜〜る 居る 居る 居る 居る  
 身ゆ〜〜る〜〜る〜〜る〜〜る 居る 居る 居る 居る  
 名 柳〜〜る〜〜る〜〜る〜〜る 居る 居る 居る 居る  
 り さま人つ〜〜る〜〜る〜〜る〜〜る 居る 居る 居る 居る  
 下〜〜る〜〜る〜〜る〜〜る 居る 居る 居る 居る  
 々〜〜る〜〜る〜〜る〜〜る 居る 居る 居る 居る  
 尺〜〜る〜〜る〜〜る〜〜る 居る 居る 居る 居る  
 蓋〜〜る〜〜る〜〜る〜〜る 居る 居る 居る 居る  
 と〜〜る〜〜る〜〜る〜〜る 居る 居る 居る 居る  
 へ〜〜る〜〜る〜〜る〜〜る 居る 居る 居る 居る  
 屋〜〜る〜〜る〜〜る〜〜る 居る 居る 居る 居る  
 素 付〜〜る〜〜る〜〜る〜〜る 居る 居る 居る 居る  
 色〜〜る〜〜る〜〜る〜〜る 居る 居る 居る 居る  
 葦 川 唯 竹 書 松 節 素 符



正徳  
七年

鶴はえつゝ 朝の白たより 律

残く樹をさぐく 中勢の和程の春 江平

蕙茶干夕波をくむ 夕火 有節

連をまらふ 宿の庭より 差約く 平

火入の煙もくはきき 魚の候 節

梅梁の細工 尺をまらる 屋れ月 平

るくろく しまにむをらまき 芳 節

山雀の喜妙をふ 冬のはつおちく 平

分りまうともむきと 尻の六掃きぬ 節

かーくく ちんねん病のふをさめて 平

むらうらう 糸の 物候の 豆まき 節

糸まきの 挿をさくく 雲あけり 平

さきりふ 物候の 傍をくく 風 節

いづ 物候の ありく 記丹生 節

終り 疾く 力をと 権子 節

里下りの つねまうく 物あけり 平

難負 雲 一人 あけり 障雨 節

氣味よけよ 花をさく 庭に 巻 平



志もわろくぬる 朱のふりこみ 平  
 蓮もよきとらん ともかひも絶えそ 全 平  
 壁の破れをまをかくる 街立 平  
 あやのりもやまをみ 端のり 平  
 しとれよぬきと 袖をうつし 平  
 径く 登り 苦人が くだる 鴨 平  
 飛上 ちとりの あつる 杯 似 平  
 扱て ちむちん にお局の あつと 平  
 人々 みの 歩き 縁多の 氏 平  
 もら 羊乃の 月 尚も つら 向か 平  
 行 足 径りの のこる 後 平  
 市 一 ぼろ 葛 蒲 若 草 平  
 煙も けし けし けし 梅 平  
 ちも ちも ちも 固 若 ち 若 平  
 予 及 ち 雨 戸 の メ ち ち 平  
 向 色 ち ち ち ち 柳 の 枝 平  
 口 結 換 ち ち ち ち ち 平  
 ち ち ち ち ち ち ち ち 平  
 ま ち ち ち ち ち ち ち 平

志もわろくぬる 朱のふりこみ 平  
 蓮もよきとらん ともかひも絶えそ 全 平  
 壁の破れをまをかくる 街立 平  
 あやのりもやまをみ 端のり 平  
 しとれよぬきと 袖をうつし 平  
 径く 登り 苦人が くだる 鴨 平  
 飛上 ちとりの あつる 杯 似 平  
 扱て ちむちん にお局の あつと 平  
 人々 みの 歩き 縁多の 氏 平  
 もら 羊乃の 月 尚も つら 向か 平  
 行 足 径りの のこる 後 平  
 市 一 ぼろ 葛 蒲 若 草 平  
 煙も けし けし けし 梅 平  
 ちも ちも ちも 固 若 ち 若 平  
 予 及 ち 雨 戸 の メ ち ち 平  
 向 色 ち ち ち ち 柳 の 枝 平  
 口 結 換 ち ち ち ち ち 平  
 ち ち ち ち ち ち ち ち 平  
 ま ち ち ち ち ち ち ち 平



上田  
三十一

梅室 松竹の音もおもやろくの音 梅室  
宮栗 火の乃の居をともよかあは月 宮栗  
全栗 火の煙をともよの音あり住付く 全栗  
室栗 多てともは火なる細のかしらん 室栗  
全栗 ありありき雨の音あき空の門 全栗  
栗室 庭の工まよつしきるるらり 栗室  
室栗 多便乃おまねれららららら 室栗  
栗栗 記ころんいあはれたまるは揺る 栗栗  
室栗 多中サカ藤のたをる梅丈くらり 室栗  
栗室 出返入るまぬ嫁入の物 栗室  
室栗 多らら屋の名もあつてき昔り 室栗  
栗栗 ころころあころの光る船玉 栗栗  
室栗 記のそ守まよけりと月あしく 室栗  
栗栗 ころころあころ燃上るたを 栗栗  
室栗 のと建と角力のまよのわき建 室栗  
栗栗 降ぬそまよぬをれなをる 栗栗  
室栗 多るうひてまよぬ花を咲けり 室栗  
栗栗 ありありのかはれたるの音候 栗栗  
全栗 多らるまよの音わらるる 全栗

上三



新の字まじりたる形體  
 情らき足をもお化よくむそ  
 新まじりたるの語あり  
 免のさるやうに尺さるる杉林  
 猪追まじりたる猪人のこゝろ  
 叔とやまじりたるおの街  
 一ふあゝとや打鉢乃着板  
 一ふあのお基志まじりたる後侍  
 つまじりたる扇こまじりたる  
 天ちのつらさるる尺ぬ二ののり

粟 粟 粟 粟 粟 粟 粟 粟 粟 粟 粟 粟 粟 粟 粟

時鐘下の奔ちるるる  
 米子やくちをとりたる炊の風  
 人ままじりたるおのちのち  
 ちるるのちをとりたるおのち  
 鞠の種は神酒をとりたる  
 二二丁まじりたるおのち  
 さるるのちをとりたるおのち

粟 粟 粟 粟 粟 粟 粟 粟 粟 粟 粟 粟 粟 粟 粟

悔とや道とおのちをとりたる  
 有節





言々〜居々〜此の春の月 御花

新葉の敷のまゝお茶うしと 節

つらりと下モとお好〜焼りの 茶山

みももそりつよまのわ〜何〜く 花

おら〜居〜く〜居〜の〜く〜地嵐 節

手伝のり〜持〜た〜居〜る〜室の〜為〜 山

ら〜ら〜く〜鳥を〜ま〜〜〜〜〜ん 花

伊勢のろ〜ろ〜の〜となれ〜ろ〜ん 節

まつ〜ま〜傳〜る〜今〜依〜の〜實〜疎 山

秘〜秘〜を〜と〜あ〜わ〜れ〜て〜上〜る〜席〜り〜 花

せ〜〜〜布〜た〜〜る〜瓜〜の〜出〜し〜ら 節

高〜〜〜ん〜先〜く〜意〜つ〜き 旅 切 若 山

き〜〜〜お〜鳴〜り〜し〜物〜む〜〜を〜た〜く 花

喧〜〜〜り〜も〜花〜々〜居〜る〜何〜所〜も 節

用〜〜〜意〜の〜筆〜も〜つ〜〜ぬ〜お〜ら〜ら〜 山

お〜〜〜〜〜〜月〜お〜雪〜ぬ〜の〜み〜盛〜て 花

お〜〜〜き〜株〜あ〜〜〜〜腰〜も〜返〜つ〜を〜 節

な〜〜〜り〜上〜〜〜〜吃〜り〜ま〜た〜〜〜〜み〜ふ〜ふ〜 山

係〜〜〜り〜先〜身〜〜〜〜智〜の〜奇〜意〜き 花

お〜〜〜世〜〜〜〜〜お〜好〜〜〜〜〜〜ろ〜の〜を〜〜〜 節



雪の明りつゝ遠まおのり  
時鐘も字のぬやうう海崎へ  
をくさき縁ふ枝杖つゝ  
生涯よ寛とも度きるおちり  
吹くも消ぬ柳のとも  
ちとんねの屋敷に生るる花  
追まわつて帰らううか庵  
つゝよしのやもさううかん  
西を走るてつゝ  
おとつゝはあつあつ  
ふ際自由のらみさき  
物くまは情の糸や先  
あつゝ腕まを御守  
まゝまきさつゝ  
うらつゝ火繩のらつゝ古  
山 花 山 花 山 花 山 花 山 花 山 花

因うきや世を世を和物あじ  
白初の色うう向ふ 月の出  
酒仕込る修上花のふを  
有節 江 今



岩中掃あか上流の麓  
 傍しそ何處とまきまのうら船  
 とちりあられよゆえるあか火  
 高曳のお人まきぬおく石若  
 自身て次くまきま焼耐  
 傍しそ何處とまきまのうら船  
 志あきと苗と知くしゆあく  
 西美流の法程よ時とすお追江  
 きとまきと大流のおりまきとまき  
 新丁よまきとまきと角力とりの縁  
 故とまきとまきと湯屋のあまき  
 住あきとまきとハ方乃純  
 茶の流しと桜控とまきとまき  
 是いとまきとまきと念仏  
 長流とまきとまきと藤防亮  
 瘡わきまきとまきとまき  
 長流のかまきとまきとまき  
 耳よまきとまきとまき  
 地あきとまきとまきとまき



よつとあつたれ赤きこころ江

うき人もあつたかゝるうらみ江

這入着るうらみ江

後もさぬうらみ江

泣くつむ医者のぢぢ江

燭の灯のちみ泣きよ月更江

尾越乃鴨水江

貞蕨よ着の志江

わらふあつたてまやき子の足江

まよひおろし江

暮らわひ江

下りあつたあつたむ花の江

床のまよひ江

戦々い竹を江

藍のまよひ江

出代のまよひ江

つまひ江

あな江



上

明ても物〜清さぬてうらん 粟  
 土つらと地建揚ひ〜侍徳 節  
 穢の下をのぬ 子とと小 粟  
 苞あ〜あ〜打〜む〜木者 節  
 当分 餘余〜う〜守 孫河佐 粟  
 わけ〜わ〜類の 瘧〜く〜う〜く〜 節  
 祇道の 陰〜月〜 尺寸〜 粟  
 梅福乃 乃〜う〜う〜さ〜さ〜う〜 節  
 いひ 打〜け〜く〜あ〜さ〜 脊戸節 粟  
 多〜物〜た〜の〜か〜ま〜ら〜 屈折動化 節  
 安〜く〜て〜笑〜め〜く〜火 打 乃〜く〜あ〜 粟  
 上 發〜た〜能〜す〜ら〜る〜と〜め〜く〜ら〜を〜 節  
 印〜ら〜の〜雲 在の 揚 於 菜 畑 粟  
 後〜し〜揚〜く〜む〜く〜と〜連 まるの 此 忌 糸 全  
 う 勢〜る〜ま〜ゆ〜乃〜ま〜あ〜ひ〜う〜た〜ふ 節  
 細 帯の 姿を 派 みる か〜〜 妻 粟  
 と〜〜甲の 袴と あ され 別 袂 節  
 死〜く〜氣〜を〜居〜れ〜ハ 病を 苦 難 人の 粟  
 折〜ハ 伽 藍の 下〜々 わ〜の 病 節  
 西 吹〜く〜雲 れい〜く〜波 鳴〜く 粟

上



尺々ぬ蒨主よるあぬけし市 節  
 鴉こらそ控人のわらう貴御傍 栗  
 掃らち掃くよせら掃けけ 節  
 ゆわらあの新をよしむくれの月 栗  
 笈をものちる鶺鴒の羽ゆきき 節  
 けらそても角アりのうすきえはる 栗  
 まこ生そ居る店古海く 節  
 香しく見る笈のたもこのまき居く 栗  
 力もや風おとらまぬ此為日 節  
 有んあ舟と出舟よ花さうり 栗  
 たまらるあまのの多き春先 節

跡も若凌んと誰れうばられのうまうけ  
 おらう一葉よ竿はらうせまらまきをかいた  
 走らせかの赤壁とかくやんとそらま  
 息しつりつりつりき諸のちをうらうき  
 わらう後の候萩らんこれとんくの  
 葉内あられうまら  
 ゆさううそ淋し加うや昼の萩 有節  
 くちみうけの跡もこの萩 梅西  
 健しきあ春を桐の葉よ春うそ 節



上  
中  
下

居られハいつきむら月  
田々るる流石なるれ松のうら  
つまをふ猫の畏るうおくあ  
美入の足るううの原を履  
何風くてもゆるの持ぬー  
彼考と嘆く存るの被衝病  
爺うふあはく十二支持るん  
あふ免う鳴るいつてもゆる  
お愛もくあて本社を記書  
あらくくもゆる被衝をたう上

それいあまふのとねむく  
牧の灯乃花よひまうく言抜  
うさふー月を惜む 西 山  
磐石若葉とむらうは撥る燈の指活  
はくもゆるは成乃長津  
翁役く舟の送りたたまわて  
給仕たまふ子のたまふま喰ひ  
子のうらあはる荒も何らぬは  
張もくもまらぬは燈のしや  
海くあらせてくね 傍 賣  
西 節 西 節 全 西 節 西 節



てりしとくもくもくはむ空 節

志不徳を補うるもむ本有海乃 西

糸多勢ねを眉もくもくせぬ 節

号くもくせねんんくもく縹帯 西

修りせくもくせねんんくもく 節

夕まきしはくもくやうま月此也 西

咽福尼をれハ勢のあま一も 節

枝持多れわやうりハのた度く 西

此くもくもく華もくもく勢ぬ 節

衡りてまをわくもくのれ物徳 西

茶目んかくもくもく藤緑の皷 節

ゆく花の一際久くもく芳雅程 西

清みくもく淫連のさくれのもく 節

縁くもく枝の古葉やわくもく 鳥谷

俄りかくもく乱る乃雲仍 杜水

石垣をたぐ波の打越く 名

わねく茶目ん人の欠披くもく 水

茹くもくの援菜もくもくもくの 名



つよふ中をわつつかまうやむ  
 空う中を居るり流まよと影まよ  
 ともやりの髪をかきう結まぬ  
 試の足利海うまれう中  
 携と毛むし一の又遠くそま  
 子のまよまねるもやりの照つき  
 水垢さきりへもあまうま  
 かつくりと瘡あまう結力ぬけ  
 一もん鶴う 巧能月経  
 居しわくす流の流も草居し  
 衣のえん過うと挽と 出寸  
 抱うと万のまき花の菫うり  
 山の御うまう 雲あまう  
 屋敷底の若枯くまは傍る谷  
 室生流乃わくう 節  
 居るうり一あまのそれちうと  
 もつそ乃お能大雲ま  
 持物う人をととうたう自身當  
 お累の跡うらうらも お  
 ありうと釣燈籠の清のこ  
 水



澁のひらきよ毎乃也れま  
新もろき子休の喧嘩うり  
居合をぬん長い口上  
楳の真珠きつり赤き月の  
後つて考のあうはうし  
多しと大も容易に借ぬを  
名拍海く乃つちういさ  
先觸り續く走る流快第  
車のあから新なるむく  
ありとと龍のたもぬはは  
みりうとまうし 伸掛か松  
水 水 水 水 水 水 水

けきくしおを後ひらきぬが  
山登りゆゑのおそき月代  
ちからうよよく利業を足まら  
くすむる藁のともね火もみ  
編さしとせそ算るし木俵  
西のふし結るぬくもう  
稀とあふ家も存る唇麻と  
有節 青松 之青 節 松 青 節

土記

三



空扇をもちろぬ汗の出ゆり  
 名を付く波も酒乃こころは  
 とき先く佛く三夜とらさる  
 長引くそまゝ想く顔もく  
 こころ世路しき種所乃傍  
 家越る病の病の帰ゆくあのを  
 白くせくおちみそれらりく  
 あおれく君のそわおる船より  
 去るの娘知ぬくやーき  
 言ひく病後をけり月夜にけ

ちやく一峰より持出すむい種  
 ぬくく足乃おちきき素掛  
 右門のうらよんくはく花ゆり  
 まく一曉をきき投持のわらうり  
 勢守りて少老をもよれく中  
 於座くくもくこまもぬり身  
 教あねと出用つてまるも子とほ  
 ちあをさまうな版乃ちりく  
 ちあをさまうな版乃ちりく



上五

友を子に類く侍うれば嫁入  
 尺ささるる夜の宿屋のまろく  
 縁を氣のまらぬ 八方  
 叶もあまう列く此山乃ち安く  
 有過くも是れ用くも過く  
 たりぬてらみ引のす着袴  
 あまもえあまの若くりのわら付  
 浴衣のわくも降るる 盆の月  
 もや生り下くは垣のちるる豆  
 よくはたれは此夜を居る垣別れ

松 青 松 青 松 青 松 青 松 青 松 青 松 青 松 青

牛初き 庚も雨乃降出  
 衣ふ掛ふ不取少くもき峠下  
 爰く のくも 神は 皆法  
 人目らよあを被衣を時候く  
 とりまうかろうかす寸法 虫  
 宵及ふ真くもまの夏とやら  
 團炉表くも春十を向くくもる  
 樹よあまの粒のむまの晴也り  
 つまらくは海のくもれ 藍 緑  
 こもあまのふ春仲乃の帰るく

松 青 松 青 松 青 松 青 松 青 松 青 松 青 松 青

上六



上  
正  
平

継ぐはらすゑ乃切し  
洗肩も物さうつらぬ花のよ  
まう、清きまらきうぬ初よ  
春 松

ゆのみ海をらん移ともつ時  
うゝうゝ遊節を下たる炭舟  
里 播 碓

戸ささるる遊れく物うへて  
まう、初て過く揚し  
碓 扇 碓  
月の如く、屋うゝそらるる

云くひもさう海、鬼灯  
掬結うらなはみ生を遊まそ  
海りも白くうゝく山岩  
紙文の派をあらうま、掬まき  
死と男乃情、まのらふ  
種の花きりよむせ風勢う  
く、まう、まう、まう、ハ  
質まう、まう、まう、ハ  
初らう、まう、まう、ハ  
月、まう、まう、ハ

碓 扇 碓 扇 碓 扇 碓 扇 碓 扇



上世七

欠伸よ淺まうせしき結くろ  
 風荒く花の言中候もつみ  
 餅まきと擡くもさるゝあひ口  
 おくまへと考をもまきく、重付く  
 世を安られともうらふ紙屑  
 自らうくまは踏ぬく帯のすうらう  
 乾ぬぬ女の封乃もなうた、  
 ありれさるゝあれもまきくつき  
 百しけりてあつてき、お  
 ろしめりてんかむらわせる、夏腐る  
 袴よまきく、身お倦、く孝  
 用ひよまきを起し、き火の也り  
 こころや精、集むかた、く、りあり  
 中よりうく月のそれ、ま、りあり  
 こころまに、お、あひく、お、借  
 ち、つ、く、お、さ、く、あ、ま、を、お、途、し  
 候、く、ま、く、あ、ひ、の、知、れ、ぬ、後、あ、の  
 候、ま、あ、の、つ、つ、て、ま、帷、る、地、を、登  
 あ、く、の、ま、を、待、く、か、り、る、後、刺  
 や、く、ま、く、れ、花、ん、と、ま、く、の、り、守、く

届 碇 届 碇 届 碇 届 碇 届 碇 届 碇 届 碇 届 碇 届 碇  
 届 碇 届 碇 届 碇 届 碇 届 碇 届 碇 届 碇 届 碇 届 碇

上世八



高きく破るゝむろの上ヶ様 碓

- 一 句法をふまへてを厚く寸一
- 一 此道と業とを多く人々謝儀は
- 一 去るて人の業乃妨と今も

古推 古推 古推 古推 古推 古推 古推 古推 古推 古推

乙名を考よらうとて古推 古推 古推 古推 古推 古推 古推 古推 古推 古推

山名の揃ふらうとて古推 古推 古推 古推 古推 古推 古推 古推 古推 古推

通子ちとこれら芳のころとて古推 古推 古推 古推 古推 古推 古推 古推 古推 古推

ぬれとまゝ出す舟の本まゝとて古推 古推 古推 古推 古推 古推 古推 古推 古推 古推

夷小おろしとて古推 古推 古推 古推 古推 古推 古推 古推 古推 古推

横島と志のめりつとて古推 古推 古推 古推 古推 古推 古推 古推 古推 古推

酒池を月うあらとて古推 古推 古推 古推 古推 古推 古推 古推 古推 古推

降らぬとて古推 古推 古推 古推 古推 古推 古推 古推 古推 古推



上丁

名をきく	蘭の	おと	懐く	寸々	本池
他人も	入ら	まき	まき	縁	縁
さく	花	産	の	神	乃
それ	さく	花	も	さく	花
白	花	も	さく	花	も
お	も	さく	花	も	さく
涼	さく	花	も	さく	花
波	さく	花	も	さく	花
土	地	さく	花	も	さく
お	も	さく	花	も	さく
終	の	終	の	終	の
あ	ま	ま	ま	ま	ま
看	板	も	出	ま	ぬ
た	れ	も	り	あ	ま
月	の	さ	ら	板	も
ま	ま	ま	ま	ま	ま
手	ま	ま	ま	ま	ま
楷	ま	ま	ま	ま	ま
浪	人	の	ま	ま	ま
出	村	乃	ま	ま	ま

二七



花の當りくく粧を揃ぬるの春 盛年  
ありくゆりよたるる 山 焼 有節

菊のさきくもほたる 枝子 為頂

雲雀のかけ乃知る 探先 陶年

水鳥の鳴乃さるあまきめきき 改

まきくくおひくくも鑿の起れやむ 年

第もの後くくはききく月の香 改

わすききて居れは後の清く好 年

萩のさきききとくくくおひくく 改

井戸の存乃おひくく 年

る把を少居のうくくは思ひきき 改

ひくく娘のあきり 眉 年

折くくも銀をききくくも風をきき 改

仁清やさの葉をんあやまの 年

つ口のうくくはよひくく月のさき 改

寝るくくもくく九の 九 年

まきくくもくく枝をききき 改

唐をうくくせきき寺れさひきき 年

さきくくもくくあききき 改



友あきおはしつたさるの節 季

おろし急譲りてめさやれきぶ 有節

まねて飛くかきせき葉屋指 無節

初為勇ふ牛も葛布の角巻を 節

おろしそくおれそ人の辺あふ 各

まこと異く月も多む川床に 節

おろしそくおれそよる風呂お 各

おろしそくおれそありけり 節

梅伏の倦り荒乃あれしり 節

おろしそくおれそきりりり 各

友達の伝振糸を耳で後い 節

おろしそくおれそまごり帯 各

おろしそくおれそ月乃く 節

おろしそくおれそ踏おす道 各

おろしそくおれそ尾城鴨 節

おろしそくおれそ両けれ 各

おろしそくおれそ揺おみ 節



五十一

苗代まきまききつ福徒 各

川くく小枯の味もちひひり

旅きぬ連の榮耀もあまき

わきまき茶所茶所の味をひま

歳さま先をかす冬の日

兄弟乃別ぬ替りも味らひ

そくそくひらり土あるはら

格子裁法も尺さきく言座敷

何変も輝らす土もれ 毫

引つ引つ作作居居乃乃ちちああひひ

ままりり首首くくれれ状状第

月もお更とみれも身の温り

灯灯けけるる蒸蒸のの息息ももるる

物物ままわわのの仕仕舞舞局局ももひひとと経経き

是是くく居居くく上上後後のの垢

長長羅羅字字成成通通りりもも子子小小り

結結くく土土免免りりにああそそふふ細細変

ちちりり知知くく移移くくもも花花ののゆゆももき

本本ままききももままめめくくははまま流流のの扱

各 各 各 各 各 各 各 各 各 各

五十二



第同乃たしふんそそ梯の突 古 権  
 葉よりよるるれ度なきき 彦 風 也  
 海を池を傳うちるる記あ持く 菴 帆  
 楊の咲乃跡るるは くも 権  
 弓獲も氣きたつる月のを 也  
 臨もを初るれ我木馬ゆせ 帆 也  
 わやく中々茎おろし田を欠き 権 也  
 生ぬるく人々もあまわさ 也  
まろくせも葉を枝の気味悪く  
 登るるしつるるぬき十月 権 也  
 此仙供るる斗と肉を志くろよ 也  
 喜るるもと起る栗栖那の葉 帆 也  
 有のりる落るるの葉を打あり 権 也  
 三つ四つのもるる故もそはるる 也  
 有るるもやそ葉もそさるるも 権 也  
 権木釣先中汁西の寸 帆 也  
 とさくくもあれも志るる園の也 也  
 小能を茹るるお上の也 毫 帆 也  
 板屋ねるるもあれも 帆 也



上七五

加太まらりゝ巽川もめく  
 尾のま子浮切過くはらりゝく  
 ん上るゝおれ葦くゝぬる 菖  
 高おりの臨歩りゝ降もあゝ  
 親くゝけりゝおくま 隆 野  
 おゆゝハむのまを喚く概の招  
 くむりゝゝあれハ笈おとさるゝ  
 降過くゝ人の居りぬぬ 甚控所  
 柳くゝと埃くゝのゝある 廣 蓋  
 仰よテ細の出あるあやうおせ  
 埒柳も相招くと廣くゝまおり  
 此茶糸當くゝ上 分まき守を  
 る満とりゝゝ高くとさるゝ  
 けりゝあそた糸御本ひとさるゝ  
 篝盤もおろそ居きぬ花の時  
 汝テのゝほのつますとと引  
 也 此 権 也 此 権 也 此 権 也 此 権 也 此 権 也 此 権 也 此 権 也

少ゝと人懐ありゝおそはらゝ  
 蕙 逸

上七五



上田  
五十五

時を追ふ 雉子のけしむの節 有節  
 朝暮の石多し里の雪をぬく節 追  
 山々々々 藤のけしむの節 追  
 猿あはれとあむあむの月秋 追  
 名もりの崎のけしむの節 追  
 胸をまてはるるちよりの節 追  
 鳥帽子若ぬきと敷きひしよ 追  
 賀草ふおのちあつとぬき 追  
 そのてしをれをきくもりの節 追  
 月代にあはれのけしむの節 追  
 空扇をきくもりの節 追  
 幾理のあはれとぬきと敷きひしよ 追  
 つらき海老屋のけしむの節 追  
 ひきまらり人とおもひぬ七の節 追  
 花さ道あはれきけしむの節 追  
 赤めけしむとぬきと敷きひしよ 追  
 救のあはれとぬきと敷きひしよ 追  
 お知りのあはれとぬきと敷きひしよ 追

上七六







籠りのけり魚乃切くま  
 の燈もひさのやま守はまの  
 空をめもも 長きそそ  
 赤凡をまつあまのまのき  
 つねさまたにうく 後川  
 連その市よまぬまの  
 湯屋乃序くまある 親者  
 竹皮よ折やうまある 美通  
 まつくく 飛く 文を 忍び  
 神ありあがりてまの月の  
 かみみのみ 別まきつらみ  
 傍岸の磯くは居れあるま  
 持くはくぬ火除乃抗  
 帯串よ 揚もきふ花のけ  
 くらく 雀の立 摺 扱く  
 かまみさくせねもまよく  
 らつるま 立ハハ 扱く  
 足 扱く 別く 若く 扱く  
 日 扱く 扱く 扱く 扱く  
 うく 扱く 扱く 扱く

柶 節 柶 節 柶 節 柶 節 柶 節 柶 節 柶 節 柶 節 柶 節 柶 節



五十四

ちれきひらりあふし降雪  
 飛つこのこけね指雪情  
 室はいふも我よりなる  
 吹雪のぬきこも志ぬ力のあふ  
 好く苦さふ乃 不 便利  
 札付てあきあつたる月の雪  
 市のこゝろぬの茶ふまきむ  
 方角乃めつらうまふ角力迄  
 著れぬかきよしんれ約等  
 後ろちろくく不暢の味  
 節 節 節 節 節 節 節 節 節 節

茶の花や雑木の中れひとま  
 りくひまあさる雪結々溜り  
 お家の隅り屏風もあてしそ  
 送りくくぬくから昔年の蓋  
 とり入も十分溜り月の秋  
 節 有節 涯 節 涯 節

五十五



曳のこをなれそなたもの紫の菫の葉  
 吹く風やうのちろよ半まわ  
 物さききく筆のろく物そわ  
 知りつても終迄の気はゆるあまじ  
 意相うそをささる物その移る  
 けうあふささる幸さき長廊下  
 のちりの猪乃うせよはるわら  
 空帰るよ彩の節うよくきのな  
 ろこそ気味わさき柱脚のあとえ  
 ちろくくと始終のゆるる雪の香  
 棟上多きけられ山 石  
 やよ入の刃をさびくまに江戸を夜  
 埃り気きくよ髪乃わじそ  
 居るあまのひらつくわつとえ  
 自由のわらね柳のつり交  
 傷ゆくて崖巖を異つかさり竹  
 志ある乃くく氷柱をぬらひ  
 唇さく谷をよまられ崖降り

節 涯 節 涯 節 涯 節 涯 節 涯 節 涯 節 涯 節 涯 節 涯 節 涯 節 涯



年時の地 震て風 乃 於 之  
 下 上 之 権 重 を 俵 く 出 ら ぬ 人 丁 女  
 矢 立 乃 知 ぬ 故 流 へ 引 け  
 万 里 亦 々 々 向 へ ち ち ち 子 娘 の 月  
 そ 々 々 々 々 細 き 玉 一 の 赤 く  
 赤 文 の 袖 釜 自 身 よ け け 後 へ  
 力 入 々 々 々 守 風 各 各 の 磯  
 入 船 の ち ち ち ち 市 の ち ち ち ち  
 踏 々 々 々 々 橋 乃 仮 板  
 々 々 々 々 々 々 々 々 々 花 の 法  
 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々

散 花 の 表 々 々 々 橋 乃 寄 有 節  
 春 々 々 々 々 々 々 流 の 赤 布 々 赤 蒼  
 帆 の 名 跡 出 入 々 々 々 々 々 々 々 々  
 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々  
 知 入 々 々 々 々 々 々 々 月 の 影 々 節  
 々 々 々 々 々 々 々 々 目 公 豆 々 々 蒼  
 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々



のそら〜 意〜 通り〜 けり  
 障の〜 今の〜 やうの〜 海もやう  
 義子も法を〜 志賀のみ〜 見  
 初拂ふ扇をひの〜 せ〜 ぬき  
 抹去く〜 紀寺に 想汁  
 つむ雪のあ〜 ぬ〜 山の月  
 雲乃ま〜 雲〜 降る 俗人  
 に〜 まねら〜 けり 古 氣  
 ぬ〜 せ〜 柳ふ 穀乃 引出〜  
た〜 柳は陸子のゆりした〜 たり  
た〜 火借〜 けり 結 汲  
 お人ま〜 さ〜 子 芥をひの〜 月の水さ  
 法華ハ〜 さま〜 つの〜 片意地  
 切〜 けり 盤をと〜 なる 別を際  
 松乃〜 さま〜 きゆ〜 雨乃 西風  
 空ある〜 みのゆ〜 あり〜 蒸 崎〜  
 入院の 僧乃 たるき 沓 考  
 後ま〜 法〜 けり せ〜 やき 崎の 若  
 教免の 舟乃 波を 抑〜 せり  
 袖 等〜 けり 向ふ 日 柳の まつゆ〜 けり  
 節 茶 節 茶 節 茶 節 茶 節 茶 節 茶 節 茶 節 茶 節 茶 節

上四十一

上四十一



うそくも書れとよく読む供  
待宵ハ度つて志くきその尾  
修も飛まると揃あ一乃換  
供あの前してと書くと揃るなり  
とらもとらきとらりの引か  
あも書きんひらりして侍宗の巻掛  
まこと初まらうと免るの席出  
花のまゝ家も免な守斗くそ  
梅子におめとくおふ茶とふ  
茶、茶、茶、茶、茶

海も草もかえそとゆくやその花  
めくおるのふまると梅 舟 有節  
月用忘経ひく傍の境ぬりて  
筆子のやきを伝へ編是寸  
うけてあうらも物らく奴甲  
去るうけとら雨下りえ先  
内強の強もたつと三の午  
あやうとつて張走こもつれ  
揃るれとらうとあうと苞の侍先  
茶、茶、茶、茶、茶

三十一

三十一



此の書

照つてぬくちめく是もと  
 うくしてはれはるる襟の疵  
 つらき梓は泣きぬ 沈  
 月影く抄のしつこしりしり  
 意の障ふくもくはく  
 空しくうにぬく赤き毛足ん流  
 庭をさるる舟をすれり張らる  
 そららふ本もさき花の散て  
 梅子のくれ尾の雉の葉のゆら  
 つくさるる若乃程あらぬ出た  
 掛合は相知りやふらん是縁  
 若くも待くハ卦んりやく  
 空垢難の湯屋は縁を法探の音  
 まく産さるる猫のかつやく  
 摺足も係縁仕の免よとらそ  
 四つも修めよ午時の待つ  
 入札の鳥はくおらるる山  
 若者乃詠を村乃あまふ  
 つしと月をさるるつくあけ麦  
 若

百五



上四十四

あきの陸乃連もま記を  
精重と送り休まへも治りあて  
肩のこゆふのまづりやむ  
勢地く射場のくらの様か  
花のひくく屋汁瓶乃あら  
あや合の儀と登のおさり難  
おく扇乃不くさうらうら

名月のひかりに響のかけれは  
物子のあかりうけくさる  
難茸乃けし満をほくそ  
たさくくらのねん志のメよき  
二二くふゆまや所走の押つま  
園りせまをまを車乃引か  
多のそちを庵まよわりる女は  
くくくく見れは多き糸所  
たの足のあもあくねま糸ら  
ふと袖引くつた老まあふ  
竹束の茶舟もや老るまあし

二四十五



月をみては明き舟乃花 節  
 花頼よりは廊をまらにうとあり 吾  
 素粒の肩の折らうつをまわら 節  
 鴨の来て居ねをうつとまらん 吾  
 すみまゝの共りよる寸珠ありき 節  
 ちとぬねをきてと整の花の匂 吾  
 白くきてひく鑽乃あと先 節  
 比よりもよふよの地の甲より 節  
 子曳の石乃縁より車より 吾  
後見して原原の寸見子た  
後見して原原の寸見子た  
 舟寸花のみをよきよき重の内 吾  
 舟く雲舟はう時の標きく 吾  
 のありより舟の足まきく 節  
 けとわすれし安の状 吾  
 船よとんまらな舟ねはら 節  
 舌より過る口の切 吾  
 候より月も枝より時より 節  
 近き女の縁ハあらとる 吾  
 懐くつとる 節 附 摺 跡 吾



の身んまのせをすまのめき  
いそくと御少の島山成り  
まゝの培を流しやの汐  
初む乃枝と足まゝの磯の糞  
あつをまゝの梅の妻の面晴  
吾 節 吾 節 吾 節

あ仙やうらうへはらたひと第  
垣招うらうらゝるる孫亮  
悠く 奇雀

あのかれをたてのめる月  
清屋のうちのまやまやま  
ちよおかろのまのたれめり  
ふつゝのなわらうの海を後連  
そとくまの産後人の存まゝ  
つんこまゝのうらまゝの招き  
おろまゝにあらゝの仲居  
漁倉のけのけを一通り  
入梅のまゝのうらまのうらま

上田十口



風名も知くせむ此書の小屋  
 札張と程いゝなり程四  
 業刻の又尺えぬふり  
 ちる夜の陰よ家鴨の子も出そ  
 古くくくさむりまむむ苗代  
 けくくくありき巖もまゝまゝ人  
 昔情まゝあゆの位捍あつる  
 産らして乃もなる婦のわらふを  
 内儀扱持りまあるけり合  
 本をくくくくくくくくくくく  
 折戸の扉もくくくくくく  
 泊巻浅のくくくくくくく  
 ろくくくくくくくくくくく  
 夕月り竿の茅茎もくくくく  
 ろくくくくくくくくくくく  
 あらくくくくくくくくくく  
 松木のせりあはるる店先  
 合羽筑おろそ二人けり合  
 上儀の御法を遠く思ふくす  
 下巻終のまゝくくくくくく

星 悠 星 悠 星 悠 星 悠 星 悠 星 悠 星 悠 星 悠 星 悠 星 悠 星 悠 星 悠 星 悠 星 悠 星 悠 星 悠

三十一



上野

たきくま 指とたれも貫をん 悠  
まのまろと 掃てつねのむるまろ 星  
室のあたまさきまる 残のかさね目 悠

物あゝりの 暫し物々月か電 米牛  
流る 簞子あうり 鳥き 撫の香 有節  
築山の岩をんららる 小羽の流 牛  
のそつそ 通る 市乃 夢さ 牛  
あゝりのまもも 是れぬ 歩 牛  
まやりの 鳴乃 ぬる 葉 牛

水戸の 袴いそく 松とや 牛  
纏て よろこふ 梳の 蕨の 芽 牛  
向より 上陸つて 復め 少る 牛  
物出と いそく 城乃 掃除 牛  
妹の けい けい けい 牛  
まの みの 乃 産を 納よ あき 牛  
篠き ねて ちよ 袴の 欠れ 牛  
山崎 かつら 乃 舎村 掃 牛  
眩くらり として 入引 出寸 掃 牛

上野



上野

伊まの船乃、るき、波、身、  
 ありのなききま下まをかんく  
 まことひるまきある、きやま  
 りてうゝつれつゝる、古まをれ  
 初るゝりしゆる、神のほを  
 出しゝる馳走、足まをてまもまは  
 いりゝゝまゝとのぬ、炭のま  
 懐よ鳥帽子かゝりて、まのふこ  
 戸よ身まをてまゝく、琴のまをて  
 付らゝる竿よわゝる、蒲をり  
 自身てまゝく、よまぬ、判、取  
 ありゝくと月のまゝみも、益白く  
 傷まゝく、のゝゝ、畑乃、程、麻  
 筆入の、末筆、以ゝる、ま、ま、ま  
 是くせ、悪く、折、ま、ゆゝ、まゝ  
 返るゝゝまゝの、み、て、煙、ま、の、火、も、お、は  
 々、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま  
 朽のゝゝ、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま

上五



穂こゝろやき山の雪麦 牛

明けのや花をわしれ返ぬらら 徳洲

水玉散らす考の船り 徳洲

能菊を爰かしくから持よりて 洲

み遍まられもやまる海寒 年

おこやうろたをて過し月の好 洲

くろくろりも持し菜萸 年

角のちりりのたぬ牛の強 洲

い万のうらへきれ也跡お場 洲

おのあこれの運入 徳 洲

新渥上々勢いよつろ線舟 洲

白屋のをそけも皆 女 年

おれををほきてらへも氣の登 洲

驚くもらぬ たふもこれ 月 年

木のるもくわする系凡の小供り 洲

春れさるも 袴乃くは 莖 年

本巻も二十分一の強系うり 引 洲

七五七

七五七



我新布一丈志つと尺く居る 年

ふもと月ハ雲深まらけり 清水が 有節

木末の松乃おらるる 夕のあり 橋洲

結菜子もる書了 鴉の羽を約て 節

子履あつらう 鴛鴦く 洲

あき付と菜もるそれと 月の白 節

くそく 白てそくく 柿の葉 洲

ふふまそら 雀卵あつらる 燈の色 節

つゆと 時流り まする 托 鉢 洲

又しそくもるく 夕霞の矢 節

鴉とく 揚のにくさ 遊 洲

芥子も 隣あつらる 大 節

指のくむりく ときる 於 月 洲

波音ふ 怖れそあつらる 美く 節

二つ乃 ますら 時つ いかる 洲

柳まらり 文々時く 煉 節

傍こあつら 是つきて 巻る 海老 洲

くねる 今る 雪の 後 舟 洲

ふら甲し 一羽のく 巻る 洲

北極星

北極星



五十三

水ももふくは浅く蛙あり那 菖池

志光り尺あを守妻の追跡 有節

それ際りの糸を知らをよ城を 墨雨

りのあまらに袖布とりとび 池

其ま変も居るもゆきふ月の夜 節

腰片ころりく葦山の礎 雨

色ん念のあま連く柄杓 池

突張ききし志つる 柳 節

各節のあまらに立ぬる時よる 雨

白枝のあまらに時よる 池

一方へ吐 縁の 福 節

勢まきあやを代り 伽の眉 雨

月くよに空けまらふも物多 池

知くまらまらし舟のきぬ 節

むせあつひまら好め風の音 雨

尺くまらに江戸よあまら 池

節を危よ極へあやる花の苗 節

黙く居きハ去ぬうくし寸 雨

ほりけく池も其まら 池

五十三



世無事

修儉の灯を絶ぬりさくは 節

空しく暮くまはるる 夜まじ 雨

井のくみたるを 釣瓶くむ 池

数人おのつきれ 切く 夏 節

まんま 如命よ づくり 侍 雨

膳の来乃 息く 福く まらゆと 池

目く 紅縁の つき 初子の 節

燭の灯の 炬燵く 四方のく 雨

雪く おろえる 雪の 降 月 池

入子の 苑乃 細工 雨

向家と 有らく 不く 借仕 池

吉々 宵く 庭を ます ゆく 節

初人 咲 暮く 是く 花の 旬 雨

出く らの 坂も 去く 掃 おく 池

古 雜の 掃く 人の 暮れ 終り 節

終 留 やみ 暮 終り きえ 雨

境 相 や 燈 くれ ゆく 水の 人 半 岩

う とう せ 鳥く ぬく 卯の 花 有 節

世無事



家招き信ふふは是場工夫一々  
 代々々々々々々々々々々々々々  
 有明も出し初月の中一通一  
 芋甲うつくは乃あ一依  
 芳引もうとくやうゆゑもろく  
 振茶のあさうとく守狗松  
 立るうとくは信守守守守守  
 浪連たふ茶のまよふ風  
 暮近うとくはあきとくはひき  
 九輪うとくは月の出とくは  
 中波うとくは陰子をゆゑは  
 人のうとくはれもはうとくは  
 袖のまよむとくは床も物思ひ  
 うろ人ふ道とくは是も寸草  
 各朝信ふ茶一あもは信守  
 中余うとくは紅の元末  
 子のまよとくは弱きまよとくは  
 花毒の振くまよとくは人まよ  
 蓋とくは咲のまよとくは屏風  
 たもとくは火おとくはあつき  
 各



上五三

借西う三名くらむる後のあり 節

そらく成き強きとえれ 節

思ふそ高き強きとえれ 節

志くそ向の終りゆき 節

つらねてとらると有紅の意 節

まらひと知きと飯のよし 節

立のちるほ高きとくく月 節

名とあきとそらとあき 節

鶴位まそよ我ふも意まき 節

画の成りかたのりの中 節

知己のうらむる人の中 節

新おらむとまきとやき 節

そらとらハ物とまきと城の花 節

菜立よらとまきと書の高き 節

扱とつけて半減くまきと 節

飛くくまきと苗代のは 節

山かまきとまきと移りく 節

妙布とまきと寸人乃 節

浮ひとありとゆきと月のと 節

素峰 有節 岸 岸

上五三



破り方残及ら守河名の約立  
 朽く事を見たりや村の流  
 まさか髪のおぬ医者の傍に  
 打もつゝ基石飛もる灰の中  
 重みの遠入意のありを欠  
 かへひあふ事なつめく月流く  
 おれつゝやうはまの...  
 折くもあつくりあせり嵐とを  
 掃除初まるとる園智のあと  
 ありけり...  
 手肘赤く...  
 よい来く角や入のうら  
 二の年も孫懐く傷き...  
 火打も...  
 くらひは破船の揚るゆり  
 明出も...  
 りみ...  
 あり...  
 長人の...

節 峰 節 峰 節 峰 節 峰 節 峰 節 峰 節 峰 節 峰 節 峰 節 峰

五十五

五十五



こゝろに他懐くくらにけり  
 つらきうに好ふ生の又うめき  
 昔いあつてう好先うぬら  
 更科の月んとあそめたり  
 引板めつてくのをそく本の  
 七寺の徳もあつてけり  
 今や 芥のくさき 風 下  
 大徳乃月けりうめりう  
 ちとのるるうのつ成んを  
 投擲を好む心花の如入り  
 つくはれけり  
 峰 峰 峰 峰 峰 峰 峰 峰

まくくねやきくふぬ雲のね  
 くくくくくと啼きま守 悔  
 別産おれとをへ通ふ捨  
 々 備 休 ま ず 宙 の ころ  
 尻肩のくせもあつてぬ月のころ  
 こゝろに実あつて葉萩乃引  
 おひるに印とて成徳のわら  
 負きくくふのりのく  
 負 負 負 負 負 負 負 負



上五十七

別れする人よ生守ゆふ業所  
 控る指末より神宮まきとせ  
 上系ハ抄より小強よ終しく  
 多清くまふ見 菴の考  
 少寸月より瘡あやぐの株次く  
 まくろ秘菴の考 放とて  
 右翠簾より雲のめり 徒彼  
 ろき尾二人り 不 禁居る  
 うれ終のわりより菴のらつきり  
 何うなるしき 菴のらつきり  
 お伯の考よりまかるとまひ  
 くく 菴子も下よりめり  
 活あし 一々抄まきれ 翠月空  
 海より 薪浅 又 告ぐ 未れ  
 就 燈の消るる 燈を 菴末 紙  
 那 當り 老く 成り 少く  
 まれ 後より 菴の 思考のくく  
 むら しの 筆の おろき 雪 降

上五十七



牡蛎舟の湯気もかたうく月今  
 けしう引ゆく時當乃有  
 祥直あつて枕巻仕の底を代り  
 尾に揺うとく床のさ低  
 扱ひくく射場うく知る人共  
 扇初くく花を先うり  
 古交もあめききたるまのうら  
 長あうりさうし地の清く  
 頁 節 頁 節 頁 節 頁 節

俳諧拾葉集

後編

五門 仲菴主人著  
葉中 授合

けき尺れハ押降しそある梅が  
 伝きうくあのをそる櫃乃有  
 かさう積く燈より代りて  
 帯帯行をと先いたせり  
 片守月そ多き乃牧う為うく  
 つ不く 著成をへるさうり子  
 尺おふそ小角力とるもさうり坐  
 梅室 有節 流芳 室 芳 室

下



折りてそ〜坊のらんや〜  
 たまふ丈儀〜つ〜鳩の糞  
 ふ〜人〜〜〜救救終〜守  
 若戸川〜わ〜や〜身〜嫁の身  
 多〜上戸の年〜つきあ〜  
 梅子木ハ九月を山〜花  
 所〜〜〜〜花の仮屋招  
 さら〜犬の癖〜〜〜信ひたり  
 何〜〜〜〜ね〜子〜  
 何〜〜〜〜〜  
 暖〜梅〜〜〜〜  
 畑〜〜〜〜〜  
 何〜〜〜〜山の間  
 つ〜〜〜〜  
 虫〜〜〜〜  
 老〜〜〜〜  
 床〜〜〜〜  
 知〜〜〜〜  
 何〜〜〜〜



是為、つもふ、つも、  
入梅、つも、つも、つも、  
何處も、つも、つも、つも、  
北く、つも、つも、つも、  
つも、つも、つも、つも、  
切、つも、つも、つも、  
聖上、つも、つも、つも、  
志、つも、つも、つも、  
親子、つも、つも、つも、

室  
芳  
室  
芳  
室  
芳  
室  
芳  
室  
芳

若、つも、つも、つも、  
わ、つも、つも、つも、  
そ、つも、つも、つも、  
人、つも、つも、つも、  
物、つも、つも、つも、  
と、つも、つも、つも、  
此、つも、つも、つも、  
ま、つも、つも、つも、  
仕、つも、つも、つも、

卓池  
碧山  
相古  
池  
山  
去  
池  
山  
去  
山  
去  
仕



橋 茂 三 十 七 食 堂 池  
 月 の 夜 は 白 雪 の 空 なる 土 用 波  
 お 横 へ び び び び び び び び び  
 焚 火 の 紙 火 燈 籠 の 影 ま じ め  
 ま じ め ま じ め ま じ め ま じ め  
 鳩 の 子 方 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟  
 ち ゅ り り ち ゅ り り ち ゅ り り ち  
 づ ち づ ち づ ち づ ち づ ち づ ち  
 仕 入 奉 納 の 音 づ ち づ ち づ ち  
こゝろ ちよととの多し 蘇 杭  
 女 子 と ちよとの多し 蘇 杭  
 舞 を ま じ め ま じ め ま じ め  
 ち ゅ り り ち ゅ り り ち ゅ り り ち  
 づ ち づ ち づ ち づ ち づ ち づ ち  
 葉 蔭 の 下 花 い ち ゅ り ち  
 ち ゅ り ち ゅ り ち ゅ り ち ゅ り ち  
 つ ぶ 延 ち ゅ り ち ゅ り ち ゅ り ち  
 そ ち ゅ り ち ゅ り ち ゅ り ち ゅ り  
 お や ち ゅ り ち ゅ り ち ゅ り ち  
 ち ゅ り ち ゅ り ち ゅ り ち ゅ り ち

池 山 池 山 池 山 池 山 池 山 池 山 池 山 池 山 池 山



さみくく風の身あはむ  
あまをまてまらふあまやい藻のあ  
いつまてて火のたもつわく灰  
浅路のたき決まふあまを  
あまあまりつくあまの  
むつくと向ふりのあまの雪  
曰あまたあて擡まふあま

山 池 山 池 山 池

物... 仙臺

大張層の物とわたりなき新下に  
仕くとまてあてあまをまら月  
あまのあまをくわく風は  
あまのあまをくわく利く  
我先まてまて納まのあまを  
あまのあまをくわく破るから  
いつまててあまの遠く擡のあ  
時くくむ行たあま  
ゆれあまあまも涼くあまあま

可大 岩 山 大 山 山 山



お折の鴉のおふりやうの毒  
流るる守牛追たれくく成るん  
なくまう一寸思へる二百内  
余りもきくひんの積も罷浄し  
捨るところゆゑおしりやうく  
茶まゝハ練のお編も宜きま  
寸あ切も免るまきの捨さ  
毒 雀 山 大 雀 毒 大

下二下  
月うまき高を五とくくめせ  
殺の羽折れつちりたり  
強るある音あひらくから車  
そを鳴くは鳴くまうく  
のりひり青くも送入様子  
見くさくころき松の枝お  
一腰ハ物り出さあまをねむ  
苗籠るく妹のこくあまき  
籠るまきよあまを失ふまう  
谷 有 枕 谷 有 谷 有 谷 有 谷 有 谷 有



叔方ふも淡きうつる負の懐	各
小平波のおのしりわゆる懐をい	各
百てあふ新ふ経緯のまけ	各
粉ふぬるも知るひまらる當良	各
藪をぬるある棟上の候	各
月をふ居のこころを花柳りく	各
そ乃乃中くく峰入乃雲	各
紙やれそ菘菜のこころを後	各
やゆくくゆくと人の尺向ぬ	各
被まをるをみたるは桐の尚候	各
あふとのへい渡	各
峰の雪を移るわづれ山紀く	各
籠の羽音りあふまらる猿	各
あふ居るに程あくるの息もあは	各
たるくく夜も是は終路く	各
あひ居るを燭もを年ぬ未だを	各
星のおのしりもあふらるる月	各
菘、さあて紫簾もはるれぬ古鏡	各
京てそあふれかふあまらり	各
三人く二やうに旅の合みみ	各



そのきるまはふたの口あく  
隆正の土戸もさういふつげ  
四の时针乃九つそらう  
挑打もなす守急の病さう  
まうさあふりの初まき喜先  
名 名 名 名

存成さるゑ先まきみらふ  
木の根もさういふ加れさる  
松の根もさういふ加れさる  
まうさあふりの初まき喜先  
名 名 名 名

うつくしうほ香とる守月の好  
助相をのりかさるまき  
子もさるまき法城の泥上  
お場飛脚の肩ゆきり  
船形の船もさういふまき  
何さあふりの初まき喜先  
ほくさあふりの初まき喜先  
新さあふりの初まき喜先  
政院丸さあふりの初まき喜先  
年 年 年 年 年 年 年 年

下七

下八







ひらりと星の尾を引て飛ぶ 年  
まの影に雲がたなびくも追付て 明  
けり程くふに流乃つて 年

うへり茶等の下を二二編 橋翁

寂下いのせまきとまの冬 素堂

用もたふふ乃おまをほひて 荻芝

隠居のふるん成後をりやうれ 具左

まろくても雨り年一始む也 松匡

去してまきと疎致の再さたり 席石

水の堀江を無きる 佐受 里翠

もやうねん孤小紋も若くくそ 了之女

春のまきと冬に福直の若くそ 翁

つと雲のけいくぬき 面傷さ 芝

おんて意のめぬ 笑天 好浦

けう名の瘦けうけも若くと持 翠

持理の屋みへ月のやうそく 左

皆従乃板のちやつくからけ死 匡



新判刀を所ひの持ろくし  
又ふりなりの遠ふさく持  
首くもさやまはく山の揚陸  
梅二  
児  
雪耕

あしー山まで

若きころは馬をかゝるはくは  
峰をたかろくはし初る月  
最入のおくはまに代て  
はひしう持る若輩のあと  
雪おしーららつくる山の勢は古  
務の佐下ハ篠のあつむ  
川越を海をよとゆもめけ糸  
濡は乃やうに若もろ持は  
ころあてまひし秀のさ念後  
浪あらせも移るくく  
あのかまは益海川のあささく  
森れいのりの積ふくく  
好もや月をめおのくそま  
相のひらきま若く欠巻尾  
うつろく丘の忍くくあめて  
采の  
有岸  
の  
若  
の  
若  
の  
若  
の  
若  
の  
若  
の  
若  
の



日やくろり威を約乃友達 旨  
 振くく落し結ひし竹を足 旨  
 谷中へくまむ其の大陸 旨  
 初年よ此宿の道をも掃らきり 旨  
 男ろりやつまを舞子しを先く 旨  
 一白の旅病をもこれの仇くらへ 旨  
 帯持あふくのそく風壺 旨  
 ちかっ好の中よつしれ嘆えり 旨  
 小まのちを結く身しを命 旨  
葉の影も早かれも夜のやまに  
七種の波女くろり低い下結守  
 水誓ひハ愚智も傳さぬ家名を 旨  
 箔打音り頼しゆりしを 旨  
 月更く奢つつもの次一凡 旨  
 友くく喬めたるふりし 旨  
 代ひくく山よ昔者の名を結り 旨  
 於ふ結メの命まのりし 旨  
 まくくも屋振らまらる腰骨 旨  
 一白ろりしるのくろり揚陸の芽 旨  
 射そめくく肩のゆもも茶くら 旨



火桶出—おく蓬草の傍 的

古帯—まへてゆやゆり苗 有節

及のり—せよゆき 留雪 仙出

生拂—下襦—花の香掃て 節

腰—掛—怪のふりつく 出

灰山—も肩ののけり—月のこゑ 節

威—に枝乃—志る 柿の本 出

物—てあつてゆく所 女房の供—さるお八るのあき 出

それ—も幸の危介—さ— 出

松—ま—川—も女ま—つかる身 出

わら—裁—たき—木の枝の結 出

新—糸—の—や起—る光る朝の月 出

切—糸—乃—輪—を—ま—るけ—る川 出

の—り—茶—の—筒—り—は—欠—る煙—の 出

そ—の—て—程—海—乃—縁—奇—鳴—れ 出

清—涼—を—ま—も—と—る—は—茶—は—ま—く 出



うらみの中より流るる星  
 つゆはるる大なるたえりわれ  
 きこくも初なる石の裏  
 樹はくぬかひの影にけりし  
 山の女所充  
 なくも有卦は入るて  
 家程のむらさきふ  
 思  
 ねらもせし戸相もわづく  
 素便性ゆくハ  
 後竹の影もつる  
 西の影もあふ  
 出る  
 月  
 打網を破りて  
 于萱あふ  
 大ぢりめれ  
 言多し  
 けある  
 ちれ  
 後  
 つし  
 水

一三  
 一三

一三  
 一三







ひろく 舞羽のまろく 風うけ  
 子のくせとやうに 家鴨を 宮あり  
 ち乃 乃とくのみ 楓わく かく  
 温るの 例と 打てく たりし 流れ水  
 大く 向くく 毎の ところ あり  
 前髪乃 志くく ためく 年の 漏  
 竹葉の 瓦成 ちつく 地車  
 存を乃 志くく 向く 痛を 伝ひ  
 大は しまつり 脚を 志く 総  
くまの海 波を 味く 志く 青の 月  
 反別 の 夜を 志く 志く 志く  
 植受も 持て 志く 志く 樹を 志く  
 地子の 志く 志く 志く 志く  
 天四 志く 志く 志く 志く 志く  
 伝く 志く 志く 志く 志く  
 花垣乃 志く 志く 志く 志く  
 志く 志く 志く 志く 志く

あり 汐の 朝 志く 志く 志く 志く  
 朝風



小田まきこらりりめそ免る月 有節  
 晴来るそよま茶も捲くあて 風  
 ふむらひ楳の葉の子々々く 風  
 積上りて葉そとたるみそそ人 風  
 笠もよ一人もそよま麦蒔 風  
 そののへいあそり人むくき酒子 風  
 村中様ふ神乃楳上 風  
 お態にまそそ用た守茶此代 風  
 漬ねく梅りり子楳葉もる 風  
 夕ま人の為くく物そ月灣て 風  
 尺さそ守まきりあまき 節 烟  
 乙身只まそそはひし上鹿新 風  
 茶盤をそ任りつふ飯臺 節  
 花さけくそそそ居れぬ高袴 風  
 うらつそそ可りりかきふそそらん 節  
 若葉の物さそそそまきまのそ也 風  
 へそそ万りりやうそはれぬる厥病 風  
 とうり岩守小居りりまきまのれ付雲 節

下十七



わつきの空へつふ 雨 水 風

曳る舟と暮を嫁まもやらそ 風

けや〜く〜ら〜りつ〜る〜る電 風

か〜る〜もつ〜あ〜は〜る〜のやね 風

あ〜る〜は〜る〜ふ〜槍〜ぬ や〜あ〜る 風

と〜つ〜く〜と〜聲〜し〜物〜く〜唐〜茶〜碗 風

こ〜ら〜は〜は〜は〜ぬ〜う〜字〜を〜写〜す 風

世〜持〜身〜と〜徳〜も〜あ〜る〜ぬ〜山〜の〜月 風

珠〜下〜り〜る〜あ〜る〜は〜つ〜ひ〜の〜あ〜る〜ま〜く 風

鳥〜帽〜子〜を〜着〜て〜お〜し〜ま〜る〜の〜角〜力〜丸 風

何〜ん〜そ〜と〜い〜か〜と〜引〜ぬ〜土〜地〜く 風

繡〜伴〜る〜そ〜流〜る〜と〜捨〜る〜海〜り〜に 風

弓〜借〜る〜の〜ら〜る〜道〜に〜は〜折〜る〜に 風

風〜毒〜く〜と〜美〜濃〜く〜清〜涼〜と〜花 風

じ〜り〜出〜る〜そ〜ろ〜ろ〜の〜か〜り〜く〜陽〜矣 風

枯〜葉〜よ〜那〜久〜ま〜と〜寒〜ま〜よ〜り〜形 風

ま〜く〜と〜尺〜と〜わ〜と〜雪〜を〜存〜る〜く〜 風

後〜中〜の〜ま〜く〜と〜最〜美〜の〜く〜ま〜く 風



宗井

楳

宗井

楳











朽く霜さむき 暮乃合目 首  
 口くみ終若もひあふ男も 首  
 支祀ちひハたへぬもやぐや 首  
 雨く松を小楯乃まら火打 首  
 披御毛跡もまきとる 麦杖 首  
 うきやして居る伯母も世成さ 首  
 たのみく二人一のふ指陣張 首  
 建かへて湯飯を月のま正面 首  
 うきや一小楯乃峰もまら 首  
 月上も籠り入御もまら 首  
 のひるの盤乃つひの梳の糸 首  
 杖持もふ念作もあふる花 首  
 海もまら江戸丘ハ芝焼 首  
 鞠壺も繡伴引ぬく暖を 首  
 染のまらあころる押もら 首  
 ふれやうに信安丁鐘のあみ 首  
 痛く人乃桶くくゆもくハ口 首  
 袖霞もあそ霞をよるまら 首  
 志くう島もまら袴若の乳母 首  
 危可も塔も眼下乃言若堂 首



飛神のこゝろのくさるゝ強れ  
 人よせよ并来ころろ守が思案  
 顔乃痛をこゝろすあふ差  
 もや鯛の針ころろぬ月のふ  
 業ころろさきく春兵実乃留  
 わりかろて季皆手つ獅子法  
 此ころろぬ辰乃海入府  
 柳形の内も出ある川とあり  
 自由ころろやろて竹の若車  
 のころろあつ十徳の語

かつ池乃唐人海手村る凡  
 瑞あ成ころろ冬乃ひそ智  
 花多結あころろ友の青れて  
 つふ全を清をこ首低名吹く  
 月代ころろく風吹くゆき  
 尾截をすころろ鴨乃投網  
 直けおと半船をくまこ都れ  
 敵ふころろ海泊の蓋



初をそそ思ふよやうなる嫁もれ  
 任宗もよきまは法華を演  
 口福のをもとば青田乃水のり  
 入梅しう改つく解方乃月  
 能のあふ肉まき居を休ま  
 能ありの流乃河をえ歩り  
 荷を付て馬の趾出せ亮車  
 吹あふ花よりする日埃也  
 眠か娘の打茶あよあめる昼の毫  
 勝りりやうとさむ壁の鬼の子

年立やあ我かみよ岸の松  
 まつとまらま枝のゆる岩をれ  
 吹しあふ赤風より長柄をさ掛て  
 石の中をさうとるそれ影つき  
 青月乃ゆりに何まもめつる  
 籠あまぬるる啼ぬれけし  
 やくそくのかりもまよか子まをま  
 口ゆりしきまあふりん  
 世あふのよれやうと解りあめま

汀 首 汀 首 汀 首 汀 首 汀 首 汀 首 汀 首



涼しくしらぬ庭多秋ひく  
降くので水花仕切のゆはは  
為乃 窓をのそく 雲隠  
松拍又春を執人あう月さ  
春う 輝るそふ ちうま 萩原  
赤後を病く 秋をふれは  
傍中つれ乃 悪い 男 小  
檀もくいすはあふれふの  
後う 持分の大い 山 やく

権 榊 権 榊 権 榊 権 榊 権 榊 権 榊 権 榊 権 榊 権 榊 権 榊 権 榊

毎口ろく 水局 危の 乱に 手  
香乃 枕音 古より 深入 する  
子 掛を 蓮る 今と 雲の 樹を  
障 かけも せぬ 物乃 けり  
かひの ちうま 手拍を ぬる ぬる  
掛乃 不足 茂 婿あき かく  
年より 八 節く 子乃 春ひま  
水へ 春の 糸の 質 素を  
生 里を 月人の 當り 春ひま

権 榊 権 榊 権 榊 権 榊 権 榊 権 榊 権 榊 権 榊 権 榊 権 榊 権 榊



冬をたをそむ早稲乃前上  
 道をもく誇らるる鳥凡  
 古事乃つるの医者わんく  
 尺相やえよきく聖槍のあまの  
 屍をさすにそらあらく  
 日利そく花のあまのくも  
 雪解くく廣くぬる川  
 採 採 採 採 採 採

蓬 茅よめき家乃万とら  
 一 具

故増の増成をこれハきき  
 鐘乃踏合り人立のま  
 庵んく十六雪道の川つえ  
 竹をたろくしはるふらる  
 汁の突るエ方のつぬを人の病  
 こころつそき寺乃寺合  
 里うたの首をくけてよる  
 帯乃りりり描のりをる  
 冬の日れぬくゆる着就  
 水満をこひく神の表  
 充 充 充 充 充 充



あらうとて用ふしたきぬ出あ  
 利らせしと後乃あたらひりく  
 込ふを吹かき、夜越も思ひま  
 狩子乃ゆららよ子信集る  
 菽をねま第ひひるるく好月  
 かせりゆめらく切中一の急  
 道如忘乃すれ板倉守人出入  
 ありのくきそくぬる 赤犬  
 わく葉の掛あて所のくまや居  
 持やうしめゆりの利ぬを抱灯  
 何変とてぬれしふ此の急のす  
 約束の人を二所ふ持あまて  
 あきそく人きとて讀ぬ經文  
 ち増るてくくした米のくひ速  
 羽折よとてく笑をねまらり  
 釣道なゆりし南らぬるの月  
 つふふ雪から乃をらありと雲  
 峰度とてえら蛙賣の首やうそ  
 きららひる牛乃くきく人を居

充 充



張板乃倒きそ埃り吹飛一  
 俄日和り花乃喰ひ出す  
 多そしあれ可しそ拵ぬ茶湯  
 人より怖ぬ峰の子をき  
 別 元 冬 別

那をを携り吹きそりや秋の森 仙菓  
 出くある月乃知れぬ日の節 素峰  
 君作の綯子後屋も人すし  
 有前

吹荷も小電ふりこすき寒く  
 山多よせぬ 麦乃 張弓  
 のり乾不し巾のうろり此強女  
 かりけてもろふ裾のまぬる  
 裾のそそ切火焙もろ料理所  
 中もゆき不そり 明も八方  
 前後のうろから意のほし  
 ちやれ電駄を内溜る屋  
 懐り小鉢たやぬ月のそろ  
 穢多り奈乃大敷そく峰  
 峰 菓 峰 菓 峰 菓 峰 菓



加<sup>く</sup><sup>く</sup>向<sup>む</sup>と築<sup>き</sup>を纏<sup>ち</sup>乃<sup>の</sup>と<sup>と</sup>め付<sup>け</sup>  
 子<sup>こ</sup>供<sup>こ</sup>つ<sup>つ</sup>色<sup>いろ</sup>こ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>も<sup>も</sup>う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>らぬ<sup>ぬ</sup>道<sup>みち</sup>  
 花<sup>は</sup>日<sup>ひ</sup>和<sup>わ</sup>海<sup>うみ</sup>黄<sup>き</sup>を<sup>を</sup>ら<sup>ら</sup>も<sup>も</sup>引<sup>ひ</sup>き<sup>き</sup>  
 結<sup>むす</sup>句<sup>く</sup>屋<sup>や</sup>拵<sup>ぢ</sup>う<sup>う</sup>き<sup>き</sup>機<sup>はた</sup>敷<sup>し</sup>衣<sup>え</sup>衣<sup>え</sup>衣<sup>え</sup>  
 人<sup>ひと</sup>整<sup>ととの</sup>き<sup>き</sup>巾<sup>きん</sup>或<sup>ある</sup>燕<sup>えん</sup>乃<sup>の</sup>り<sup>り</sup>か<sup>か</sup>よ<sup>よ</sup>  
 毛<sup>け</sup>巾<sup>きん</sup>巾<sup>きん</sup>巾<sup>きん</sup>巾<sup>きん</sup>巾<sup>きん</sup>巾<sup>きん</sup>巾<sup>きん</sup>巾<sup>きん</sup>巾<sup>きん</sup>  
 燈<sup>あかり</sup>を<sup>を</sup>消<sup>け</sup>を<sup>を</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>く<sup>く</sup>拵<sup>ぢ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>巾<sup>きん</sup>巾<sup>きん</sup>巾<sup>きん</sup>巾<sup>きん</sup>  
 約<sup>やく</sup>瓶<sup>びん</sup>乃<sup>の</sup>繩<sup>じゆ</sup>の<sup>の</sup>珠<sup>たま</sup>と<sup>と</sup>曲<sup>まが</sup>り<sup>り</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>  
 尺<sup>しゃく</sup>付<sup>つ</sup>く<sup>く</sup>よ<sup>よ</sup>らぬ<sup>ぬ</sup>男<sup>おとこ</sup>の<sup>の</sup>氣<sup>き</sup>れ<sup>れ</sup>よ<sup>よ</sup>を<sup>を</sup>  
 不<sup>ふ</sup>浄<sup>じやう</sup>は<sup>は</sup>せ<sup>せ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>  
 亦<sup>また</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>  
 井<sup>い</sup>と<sup>と</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>  
 主<sup>ぬし</sup>乃<sup>の</sup>身<sup>み</sup>お<sup>お</sup>替<sup>か</sup>へ<sup>へ</sup>人<sup>ひと</sup>を<sup>を</sup>れ<sup>れ</sup>  
 肩<sup>かた</sup>入<sup>い</sup>る<sup>る</sup>つ<sup>つ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>う<sup>う</sup>月<sup>つき</sup>の<sup>の</sup>縁<sup>えん</sup>と<sup>と</sup>く<sup>く</sup>  
 袴<sup>はかま</sup>う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>え<sup>え</sup>ん<sup>ん</sup>き<sup>き</sup>八<sup>はち</sup>ぞ<sup>ぞ</sup>う<sup>う</sup>あ<sup>あ</sup>れ<sup>れ</sup>も<sup>も</sup>帆<sup>ふ</sup>  
 小<sup>こ</sup>山<sup>やま</sup>和<sup>わ</sup>と<sup>と</sup>つ<sup>つ</sup>ら<sup>ら</sup>た<sup>た</sup>中<sup>なかつ</sup>る<sup>る</sup>古<sup>こ</sup>学<sup>がく</sup>鞋<sup>かぶ</sup>  
 九<sup>く</sup>十<sup>じゆ</sup>糸<sup>いと</sup>よ<sup>よ</sup>ろ<sup>ろ</sup>れ<sup>れ</sup>と<sup>と</sup>傳<sup>でん</sup>馬<sup>ば</sup>休<sup>やす</sup>め<sup>め</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>  
 飯<sup>い</sup>を<sup>を</sup>食<sup>た</sup>べ<sup>べ</sup>る<sup>る</sup>者<sup>もの</sup>を<sup>を</sup>其<sup>その</sup>粥<sup>じゆく</sup>を<sup>を</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>  
 ろ<sup>ろ</sup>く<sup>く</sup>く<sup>く</sup>銀<sup>ぎん</sup>乃<sup>の</sup>杖<sup>じやう</sup>り<sup>り</sup>出<sup>で</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>





聖芝居の物も大くこぼれあり  
積押くすしたに芽もる孫の指  
峰 節

落る聲つかりとてこれ多雪雀  
うきとやけともあるかゝる丘  
長家ろる雪陽さしゆく智立く  
庵んてらもぬい今乃こゝかひ  
志んづんより茶好る家の松ふ月  
梅 草丸 千権 道標

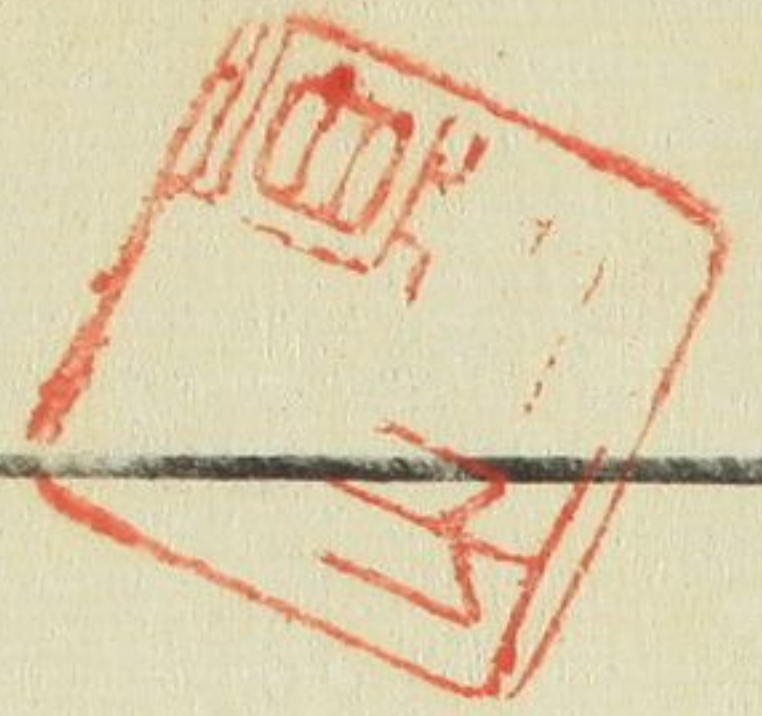
かゝとよあまのそたむ統於  
志ひらねと馳まるとんを府付能  
縁くつ甥乃成る 音 位  
弓士の能くも似きぬ丁寧さ  
併きと鉄の又つをひ出し  
くくくと盃の月おのめ安く  
旁より行くく大神の鏡  
好風よ并ふの堤乃実かりし  
あんとくおとる兄のちんえん  
梅 丸 権 梅 丸 権 梅 丸 権 梅 丸 権



掃除して掃うけあす是の陰  
 ちくくくくくくくくくく  
 山姥とくくくくくくくく  
 子乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
 羽折くくくくくくくく先  
 怪我くくくくくくくく  
 ぬくくくくくくくくくく  
 寒くくくくくくくくく  
 清局能古若くくくく  
 神の神くくくくくくくく  
 各くくくくくくくくく  
 一谷くくくくくくくく  
 秋たくくくくくくくく  
 若侍くくくくくくくく  
 窟と入くくくくくくく  
 猪持のくくくくくくく  
 江戸くくくくくくく  
 引込くくくくくくく  
 奇くくくくくくく

丸 桂 楸 丸 桂 楸 丸 桂 楸 丸 桂 楸 丸 桂 楸 丸 桂 楸





よれそやふまろくとも一体之 是様  
 々物尺一山もかきむは意中 其音  
 そとあま雨の上り乃経子啼て 様  
 すと得まぬとその口めけ 音  
 月待く村のあひもあそふ 様  
 乃こるあつさくはる 肩ぬく 音  
 菱うね柳舟と舟をつら記す 様  
 一ッあま羽折と伯父は借とを 様  
 表一歩も入新餅の声 音  
 久しう髪を洗ふてきんすりと 様  
 ゆいさうく待店の水存公 音  
 雪月のかけめくくは流の美 様  
 一ん酒まきんくすうをさる 音  
 築ゆけの鯉とそりく突る 様  
 酔乃らんくまの世とり 音  
 けく菱うねくま替あふ 様  
 もこく記まねたんを 様



手形もつとさきくさうく人のあ  
 俗初の忍くさ小控くさ乃女  
 妹も宮の流伽くさ磨きくさ  
 さく多れ乃臨くさ深むりのれ  
 唯はくさく舌突くとわ寸小縁奏  
 けやむ風くさ雨のさくつく  
 ものを柳馬のたつさ山さ  
 明ささくさくさつらこのまら  
 孫ましく作さくさくさく  
 風吹くさ後さくさくさくさく  
 月のおさくさくさくさくさく  
 孫さくさくさくさくさくさく  
 娘のさくさくさくさくさく  
 よいりれあるさくお辰のま  
 さく馬さくさくさくさくさく  
 めさく一杯さくさく碎さく  
 たさくさくの宮乃結さくさく  
 巻さくさくのさくさくさくさく

榎音 榎音 榎音 榎音 榎音 榎音 榎音 榎音 榎音 榎音

下世一



植そくし杉よきくや福安寺 采明  
 わくくもつり乃かけ真ま惠 曲洞  
 着て西を物産は標の辨りぬ 有首  
 原を居る子乃よく吐きく  
 待宵よ近く空のまれつき 洞  
 後く山を守り市のをうめら 首  
 何ゆへ秋に信守主生念佛 明  
 多ふもと連乳老のまへ 洞  
 電燈く隣る南変乃是能はれ 首  
 舞のり歌の土に標の教の声 洞  
 引つる杉を婦りつまき 首  
 月かけも時く朝をる天教日 明  
 雲く朝をく地まらうの幣 洞  
 暮るも時く午の毛見朝人 首  
 月も降入る六乃淡乃舟 明  
 貝けもわきと蓋きぬ首あき 洞  
 うつる木をりまむ 弦 延 首  
 従ふも満る月去乃まきく 明  
 噴くもまき先節の紋 洞



其書尺と目とる所も万が一  
 古より解をうくる冬向  
 一入るもさる法もさおおる  
 小石もさるえようたる山  
 身を控へ二人車とる曼思ひ  
 ころり傘しころり袖  
 尚ほ次と出さるる是場と接す  
 子紙もあつたのむきと吼く  
 ころりぬす線路の声とさるる  
 湯毒地の跡もかきく大早  
 何とあるとあると其方の旅後り  
 せとさるころり乃發の結ひ  
 然りつと線路はあふ人ころり  
 もあつとわつとぬ結れの文字  
 候約の解もゆつとるさあて  
 去来ころりころり其の地と  
 絶くころり其のおとやこれ  
 其乃り折ところり玉玉  
 三折里  
 卓他  
 三折里

三折里  
 三折里



通ひ橋下籙りかけ替え 石采

鶴く々々き一一銀い争り取り 他

かくひひのの取りをそめる盆の月月 里

最く々々六六乃乃亦亦 萩 采

その好くいいぬぬ桑桑山山もも作作 池

白白瑞瑞々々々々 祿祿直直のの徳徳々々 里

ららきき赤赤々々々々のの果果々々々々 采

馬馬乃乃目目利利々々上上々々采采々々 池

楠楠のの索索々々々々々々々々 雨 里

ああけけ渡渡々々々々々々々々 秋秋のの月月 他

切切々々々々々々々々々々 輪輪ののよよくく 采

舟舟乃乃中中々々々々元元のの名名々々々々 里

法法師師のの供供々々々々下下々々 橋橋 采

二二々々々々々々々々 肩肩 池

りりくく々々々々々々々々 侯侯 里

瑞瑞のの々々々々々々々々 采

給給々々々々々々々々 採採 池

様様 採採 里

世世々々々々々々々々 采

身身 採採 池



先のまると流乃不るる寒替り 里

とさか〜るる矮陸乃船崎 采

中〜〜〜曲録持り〜るれ 池

丸一〜酒をつ〜 里

相〜の解り自中る下の夏 采

採 湯〜町乃 里 池

ゆ〜のゆる月〜稲も〜我〜ら 里

赤か帯の基も〜の〜〜〜 采

新まぬも〜若給合の個 池

織〜〜〜の〜〜〜 里

鳴〜〜水道〜信も〜らり〜 采

弥生 鳥〜〜 池

山〜の〜も〜ら〜り〜 里

まや〜お〜〜〜 采

接らぬ〜果報〜〜〜 二町里

尾〜り通〜〜〜 茶園

水山〜りた〜〜〜 卓池

浩〜の〜あ〜〜〜 吉布



傍のそ乃天晴そめし月かゝる 石采  
 人ちきりくくまらる 橋 以 電甚  
 角力場を一方口乃外圍ひ 里  
 丹波市くくまらる 布  
 追くくくくあ糸乃行り 池  
 娘のやうる嫁めらひ 布  
 新しき肉を杉戸のよく白ひ 蓑  
 形ひの雨乃海をくく降る 采  
 月の入あをく火串の焼つあり 里  
 付くくくくくく馬のゆき 池  
 ゆつくくく雪供の鏡乃洗ひ上 池  
 志きりくくあく矢中の声 布  
 何くくくくくくの敷立て 采  
 日くくく酒のちくくあくか 蓑  
 宿をくくくくくくく 園  
 飯の煮をくくくくく 里  
 身くくくくくく似合の煮のそたる 布  
 ハ情りくくくくくく七夜さ 池  
 笑くくくくくくくく 蓑  
 着くくくくくくく 采



雲母りりの上とあまやまと其そ  
 ろと純り乃ほつらるあり  
 珠のまゑるらそほく月の照  
 書乞ふ若乃引書やさしと  
 珠のまゑるらそほく月の照  
 吐しそんそふ知と素合  
 白物そそ急そそそ天系  
 有とふそそそそそそそ  
 牙の元後後ほひいそそそ  
 ちららくと義本そそそ  
 向ふ隣り玉草若そそ  
 采 義 比 布 園 里 兼 采 芥 池 里 園

木常の雨りとおらそそそ  
 麦飯とらのほららそそ  
 けしそそふ小梅り籾のしそ  
 たきそそ茶そそそ味のそそ  
 透そそそそそそそそそ  
 そそそそそそそそそそ  
 月 采 曲 有 出 洞 采



連合してそとにあり舟の者  
 大ききとと病有りあきき丸た本  
 持てあき居る地走も人まひ  
 子降りて籠と梅ゆきる鳥  
 法をこ一息初なる野のうせ  
 春をとらきる女所の本のあり  
 夕月の山をまねてこころよき  
 独くそらせぬ後平雲乃灰  
 括りて毛柄のよくぬる古箒  
 古物ま主人の人乃ちあらぬ  
 ちりちりと降りてかきふる葉のを  
 こらんとてひらふのころ春の物  
 ありあかりの隣りあそび近く  
 後の具乃四くううと裾引  
 介くうと知てあきある鉢木羹  
 物くくと角下もきぬ紙を云  
 雀籠り知りもはさるる形をそ  
 く新くそ箒とれ嫁入の舟  
 籠りある若きものかきこしる風  
 まさし付ぬ概乃枝お

歩 洞 歩 洞 歩 洞 歩 洞 歩 洞 歩 洞 歩 洞 歩 洞 歩 洞 歩 洞 歩

下五



若くは細きのひらきとて千の隅の内  
追従ふふとつふ不不森當  
更て於力のけけ清き宮の月  
むきやくくのけけすくろえ本  
行くのまのわつくくと白ふるの松  
を際より集りて益の十を葉  
氣安きとて十徳松を横にあり  
足跡をとつて人乃供てつ  
時中のまをうけく 環のま  
南にけけれくきおそき 園

雨をを減くく白柳やまの横 蒼電  
陽光のわけぬ 岨のつみ 宋 曲洞  
耕作乃何まもつまる響をそ 有音  
本方刀の音もはつむ響をそ 電  
かく下たもくくわて歩り益の月 洞  
得地ぬめくかてひらきの尾 音  
つらもより村のまふ約む人 電  
身の用ひりて三里くくまぬ 洞



送りし引出しとてく披の  
 多きく世伏の是問ふもれ  
 夕つきのくくくくくくく  
 神の利生の西くくくく  
 一くくくくくくくくく  
 出代くくくくくくくく  
 きつるくくくくくくく  
 だくくくくくくくく  
 けくくくくくくくく  
 けくくくくくくくく  
 けくくくくくくくく  
 伊のあくくくくく  
 女房のくくくくくく  
 迷ひ子存るれ 菘らく  
 電透くくくくくく  
 誘 伝手くくくく  
 村中、救免の噂くく  
 海くくくくくく  
 ころくくくくくく  
 百物語九十まで 海む

電 音 洞 電 音 洞 電 音 洞 電 音 洞 電 音 洞 電 音 洞 電 音 洞 電 音 洞 電 音 洞 電 音 洞

百物語



仲崎の隣りまひく月更て  
 春と山と声とあやう  
 親子して後ひの雲をまよふ  
 水鳥乃りたつる園のまねを  
 あやうりの音とくまの音  
 おひのそとる華陽三めり  
 卯月まて持と守定めは是  
 月とそとやとて木の橋口

洞 音 電 音 洞 音 洞 音

かり傳へ鶴も力や一羽を  
 松の古葉乃落つては庭  
 あり乃酒山やとるまは榎うけ  
 味うき酒を言ひ真う考  
 たり果ぬ角力あつる音の月  
 ひとくも夜より冷を受れ  
 新絹の若出し一即ち舟出所  
 風とおもはるる雨のまらしく  
 針立の二名もあをうらむ  
 瓜強きくもろくぬ水停止

春室 曲洞 南唯 室 洞 唯 室 洞 唯 室



枝より毛の揺る出る一室の病  
もる一物とおもふと峰  
夕月より掃らきりたる建仁寺  
羽折こもわる秋のまき一ひ  
お休を彩とて志ひの粟子餅  
あゝ一有卦高一滝溪  
ゆらりと信守寺の咲そらひ  
麻まゝく石をそのけとおく畑  
唯 洞 室 唯 洞 室 唯 洞

もも引ハ嵩原よかきる清ありま 有節  
歌そよよと合款のそ花散れ 如柳  
彼風鳥の向ふ尺陰守笑と立て 節  
二日乃月此入らそそきけは 柳  
綿舟波横る原あり 長 堤 節  
夕月より掃らきりたる秋のまき一ひと 柳  
憲竹より毛の揺る出る一室の病 節  
申刻より一ひとを知らぬお 柳  
是より毛保書原の咲ゆまき 節  
凍るももやま 山乃下道 柳



とら尺も本家斤の本具細工  
 新く如合ぬ始り一も  
 従ひりの髪と石あわぶ那の月  
 うさ乙乃乃落も菓の土  
 ちの陸のきられろそら早き勢  
 水下侍も傘もかきまは  
 川床乃そろくくもやるを吹そ  
 董ららわくうらくうら空  
 本家之地突ものひる孫生を  
 りのたろく敷く地走のたろく  
 ひとろく歩役をくく踏のうら  
 八と呼吸ふあも牛もあろ  
 乃る傳く夕立の雲のひらうそ  
 ちろあのおも何そななき峰  
 急くらん落くかりと二人振  
 分お知ぬ恋乃の受さ  
 去とそふ移りまのそる借し  
 長滞るく一弦の具焚す  
 志りくく月くくまりの返るを  
 雲さひくく湖乃ハ糸



以爰より板こわすて庵の屋拵  
 のしるす盤しく厚く板粒  
 ありとや弥陀の来迎まうり  
 血縁の考く畑もこころを  
 まつらりと夏へ持こころを瓶の  
 音も入るある籠の黄毛

東蒼

岩角を若く外へ返り妻の  
 軽舟のこころき葉の初刈

海苔のまの久き富の板瓦  
 燈りのせおくかこころを  
 物もあそびもあそび月  
 りりし乃あそびあそび  
 山もあそびあそびあそび  
 音結のうらみ松くつる  
 飯もあそびあそびあそび  
 中もあそびあそびあそび  
 深もあそびあそびあそび  
 ありあそびあそびあそび



出る月の照るをよみ信の晴澄き  
 あのをさる早穂を朽しう支成不  
 るれ付ぬ帳氣のふれ居居時  
 建具そのまはりりるきあ  
 取うよくそるあ人もうわる出書生  
 わくそくし杖のかるれくそ漸  
 雨をそとまきくそくそ麻をそあ  
 毒利る理函もくそくそあ者  
 茶上戸の魚お入あふ市立く  
 茶鏡乃茶師ゆきうくそ拵境  
 茶のくそくそ友あくそ侍る境くそり  
 池とくそくそ蛇のまきくそくそくそ首  
 用心の杉竹をくそあふそまえた  
 足しくそくそぬ妹の病むをくそくそ  
 つくそくそくそ何あくの抜あも雨降く  
 むくそくそくそ雀をくそあうくそくそ聲  
 ちくそくそあ月くそくそくそくそ山押除  
 順鏡ひくそくそ色まきくそくそ秀  
 皮剥くくそくそ餅るをくそあくのくそくそ  
 くそくそあくそくそ又も入室押くそくそ



代きらぬうらわしの世に不姓第  
 名受の各を掛 目まくらき  
 華城くは用らぬふをのけ  
 物明らきしと名のとさひつ  
 第 第 第 第

晴移りり結出の赤き小坂式  
 寸くは清ありりよわふ若の音  
 悲しく一雨く刻ありり若とあそ  
 明きく一華の雨よりく下る  
 有節 相一

味上く庭所も老ふ月のさあ  
 つけそよ引ハそ枝のこころ  
 代換えぬと世経しと廻り先  
 よき手居る袖と牛の招り  
 方縁ある形もよと初まをり  
 やえらまは婿よとよぬ森は  
 庭つくとく長くをさるぬ、兼  
 小春の繩の控くとも月  
 小春もともたるこころの仕舞船  
 若者柳と肩よりさる人味  
 第 一 第 一 第 一 第 一 第 一



半と首のあそび引きぬあら格子  
 阿やましく用ひし縁を居ぬ是  
 招きしそたそこの味き夕人妻  
 此しあたるる 畑乃おあそ  
 あのをやましく 嶽々 晴々と 春夜隣  
 又らうしくとねるる 血の道  
 らのそ居るそころ人考ふ精を来  
 旅生稼りくこころい世の町を  
 むし干し飯委はと居つくりの出そ  
 地震て 悪鬼のぬるる六月  
 そよめくと 縁ししく 女子北  
 名どりの 帯屋人そふさくや  
 やるせろく 夏のはげのひくも  
 半らる 築く 欠るぬ 掛押  
 ねのそも 概乃 大木月々く  
 ひやくく ありれあたる 箱舟  
 浮鞋のそくく 重くふく 舞葉  
 むらうあそ 氣味の 日暮し 印お  
 十みるるれハ 扇も 灯を 上く  
 西くそ 乃そそそ やむを



友をのほら付あはれし以交り  
やまらふし句を種乃小依  
山

一りの風乃あまらや萩の急  
山

月を懐くさぬ意の切け梅  
山

松茸を大振るさ切入る  
山

徒をよりのろつき  
山

浪連のめかききひりつて  
山

えさけりつるるるるの燈  
山

雇ひ出せり年淫般す休む  
山

茶より世後のたふ自怪き  
山

口當りよき返せしあはれ酒  
山

吾もそとそそ暑き照  
山

初めそとと廊めをぬ柳早  
山

かくさそそ名をさし傳おれ名  
山

木栗の神よりそそ起る月  
山

むくく乃そそ天晴る  
山

魂柳もせらるるそそあはれ  
山

病ひのやそそ人うさか  
山

山



菟の毛を先る午よへり付 悠  
 衣の毛よりすらすの室 古茶  
 磯の毛身ひらふ桂のつらも 是  
 初らんてゆぬ未産の産る記 山  
 新尾の自利いさなは仕わす 古  
 釣瓶乃乳をくくくくくく 悠  
 家移りし粒の体木の粒たふり 山  
 そらそらすれそきかふる年 是  
 炭移りし車おりのりり坂 悠  
 席か穴より履板をくくくく 古  
 彦屋よりちさき楯の大輪寺 花  
 やあふてあふふくくく 振の毛 山  
 移り鳥のま中うたうささの月 古  
 すくさぬ燕を移し服を病 悠  
 庭をさうく 咲き出入の物葉を 山  
 拵よりそつひさそそぬおと庭 花  
 おまのりぬまをささき 悠  
 川より麻くく毛の毛くく 古  
 十徳のひらくくくく 古  
 ころくくくく 湯く 盆の壺菓子 山



田了りきし味す世々や初あり 有節

月の昇き入つよ流川 音 札柳

老むく炉穴くらか守火をくく 音

しもくく結をく結をくもあぬ 柳

そくく何ぞもつふやく通る雨 音

若くくく成りく物なる木葉 柳

繩付く池くおくむ燦 柳 音

くらえあをくくくくくく後 柳

壁紙より舞の足音かまき 音

思ふくよりハ寒くく 音 原

皆有く身くかけく年去相 音

ゆくる後一の急く出くあぬ 柳

鶉の書くく語くく尾羽不枝の月 音

又葺山のくくくく 音 柳

磐石をくく仕込抽くくかき 音

待てて用くくたぬ古紙又 柳

音 音 音 音 音

くく乃くくくくくく二の年 柳



とらかきふ越り 飯積のとりを

孫おし 向く 滝 志命ふ

空おし くの 水車 のつむじ

みつけし 知る 釜の 作の名

をわし みる 神 くらき 下り 協

思ふ ぬり けり 是り けり 是

人 是を 呼や 書く 理 修く

一 けり おり 峠 二 友 越す

自 ころ 八 細 あ べ の 沙 志 是 反

徳 利 を 例 けり 存 けり 是 是

おの の けり けり 越く なる 越 け

けり けり 越く 越の つく 音

越 是を 越す 越す 越す 國 越す

けり 人 地 海 の なる けり けり

日 上り 成る 越 越 越 越 井 越

おら けり 雀 乃 けり けり 交 けり

けり けり 越 越 越 越 越 越

けり けり 越 越 越 越 越 越

けり けり 越 越 越 越 越 越



日るるも三月十日の爲らん  
 びとる身もるる 築乃つとく  
 村邊ききる 洗濯の裾く  
 尺本にて 皿の高しを  
 大振るの 扇えぬる 扇る  
 妙 女きあたる けされ  
 完和

卓池  
 如菜  
 院

池  
 菜  
 菜

沙路  
 如菜  
 而后  
 益石  
 莫山  
 大巢



果園

来とひるる 羨る声のほろひたり 有節  
 名をあら 穢よはらる 蓬 菜 萬明  
 茶 戈の雪色をくらふ 袖振りて 節  
 櫛 跡 さらの 物 抄 ぎ 出 守 明  
 谷 あり 八 百 多 少 けい せき 月 あり 節  
 班 州 よく 啼 掃 よ せ の 中 明  
 紐 之 して 石 路 あり せき せき せき 節  
 多 かり 不 じ けい せき せき せき 山 城 明  
 院 候 上 衣 の 洞 けい せき せき せき 節  
 ち せき せき せき せき せき せき せき 明  
 識 せき せき せき せき せき せき せき 節  
 恋 せき せき せき せき せき せき せき 明  
 春 せき せき せき せき せき せき せき 節  
 春 せき せき せき せき せき せき せき 明  
 錦 せき せき せき せき せき せき せき 節  
 春 せき せき せき せき せき せき せき 明  
 羽 二 せき せき せき せき せき せき せき 節  
 ち せき せき せき せき せき せき せき 明  
 打 細 の 埃 けい せき せき せき せき 節



穉のやうらの多利を交り  
 多利もすうりし海に打つれ  
 つゝかゝる櫛をすうる已をさる  
 思ひあふら互乃指くを  
 流しも櫛もすうる水  
 畜匠の新ハ結句にゆふり  
 初種乃よきに火防札おく  
 かりおしるえく種のをあふ  
 皆人たさる子度乃出湯治  
 西よりとめいし月をいさる  
 絡若くうううの尻  
 指めりり埋めく種をけり  
 成のううくく実をさる  
 俣櫛を織てをうく二人口  
 時又の竿より新かさる  
 ころるをうを隔る松木垣  
 男流も去る新なる  
 けうを黄毛のや那のふ口  
 糸衣をうをさる去る新  
 有節 曲洞



折ふる菊紙めくたき名を存て  
 日 備の早らうし座ををすぬ  
 燭乃灯と照し月山の山をれ  
 押しををすく座の櫃のを  
 除るをくつと稀菊の所は後  
 やしをる狗のつりる磐石を  
 押しよく等とをすぬすたし血  
 晴くすをくくは戸の十月  
 結ふの何も用るをはるを年  
 甯くくくくくくくの子たし  
 後添ふ不性ふあけををかき  
 泣く二つりつひをゆる月  
 秋もくも壺ハ袖のすくは  
 雲くくくくくくく乃古墓  
 やくくくくくくくくくく  
 昔 結のくくく 紙の部と  
 昔 如馬の世経くくくく  
 昔 年くくくくくく 車れ 辰か  
 昔 向くくくくくく 通くくく  
 昔 羽黒 色くくく 夏 寒くく  
 洞 昔 洞 昔 洞 昔 洞 昔 洞 昔 洞 昔 洞 昔 洞



就きよむくく 倒きく 大板 音  
 もくゆきくそくく 鏡を肩持 洞  
 表をきくく 羽衣をぬく 秋の月 音  
 初くく 居るくく ゆくまきく 音  
 楯くく 我名をうたふ 女子は 音  
 うらりと時をわぬく 月を 音  
 入船も 船く 障りく 月のく 音  
 わくく 基打も 世 第一く 秋 音  
 初くく 古き 浴衣も うら 付く 音  
 縁をきく 人の 精をた 音  
 世 事く 大が 扇く 物 音  
 招 鏡を 利く 月 音  
 表 表の 花を 音  
 峯に 忍る 音  
 秋 月 音  
 うら 音  
 追く 音  
 兄 音  
 何 音



雪車をひきあそぶもよしとて成り年  
 鐘を鳴らす場を遊ばしうらんで  
 上りて降るもよしとて思ひよ  
 大須磨のつらきもよしとて思ひよ  
 引つる裾のぬきもよしとて思ひよ  
 梅をみよとて思ひよとて思ひよ  
 尾をみよとて思ひよとて思ひよ  
 提灯をみよとて思ひよとて思ひよ  
 梨子をみよとて思ひよとて思ひよ  
 桐の葉をみよとて思ひよとて思ひよ

やうととて思ひよとて思ひよ  
 桐の漏り  
 力

生ねたうらとて思ひよとて思ひよ  
 暖  
 力

あつととて思ひよとて思ひよ  
 暖  
 力

約をみよとて思ひよとて思ひよ  
 枕五  
 力

あつととて思ひよとて思ひよ  
 史  
 力

負をみよとて思ひよとて思ひよ  
 五  
 力

まよとて思ひよとて思ひよ  
 五  
 力

家内中をみよとて思ひよとて思ひよ  
 五  
 力

あつととて思ひよとて思ひよ  
 石の切  
 力



芳引ハ名の向々の考ゆれく  
 めつとつともあなぬ無位寺  
 後立の時とて歌の葉はしく  
 統子の徳乃はあたるささやき  
 降しとて先何より乃別建家  
 細布衣あおろす靴臺の月  
 降るりと徳心のあふ河床節  
 若中を乱のむつくとさふ  
 標子よもたをそ給し夢さる  
 勿体らとさき後の洞佛  
 そとらうそも凡のう紀をそをの志  
 挿とせ孝乃しむむるのひと

衆福とてあふりあかり  
 笑乃あはれあふるる  
 嘗の音とて今もさそ細けそ  
 身乃暮もそそぬ以こそ  
 花中とて書あはれとてさる月  
 昔の指あふりあふるる  
 社家早とてさそけ梅と授めれ







